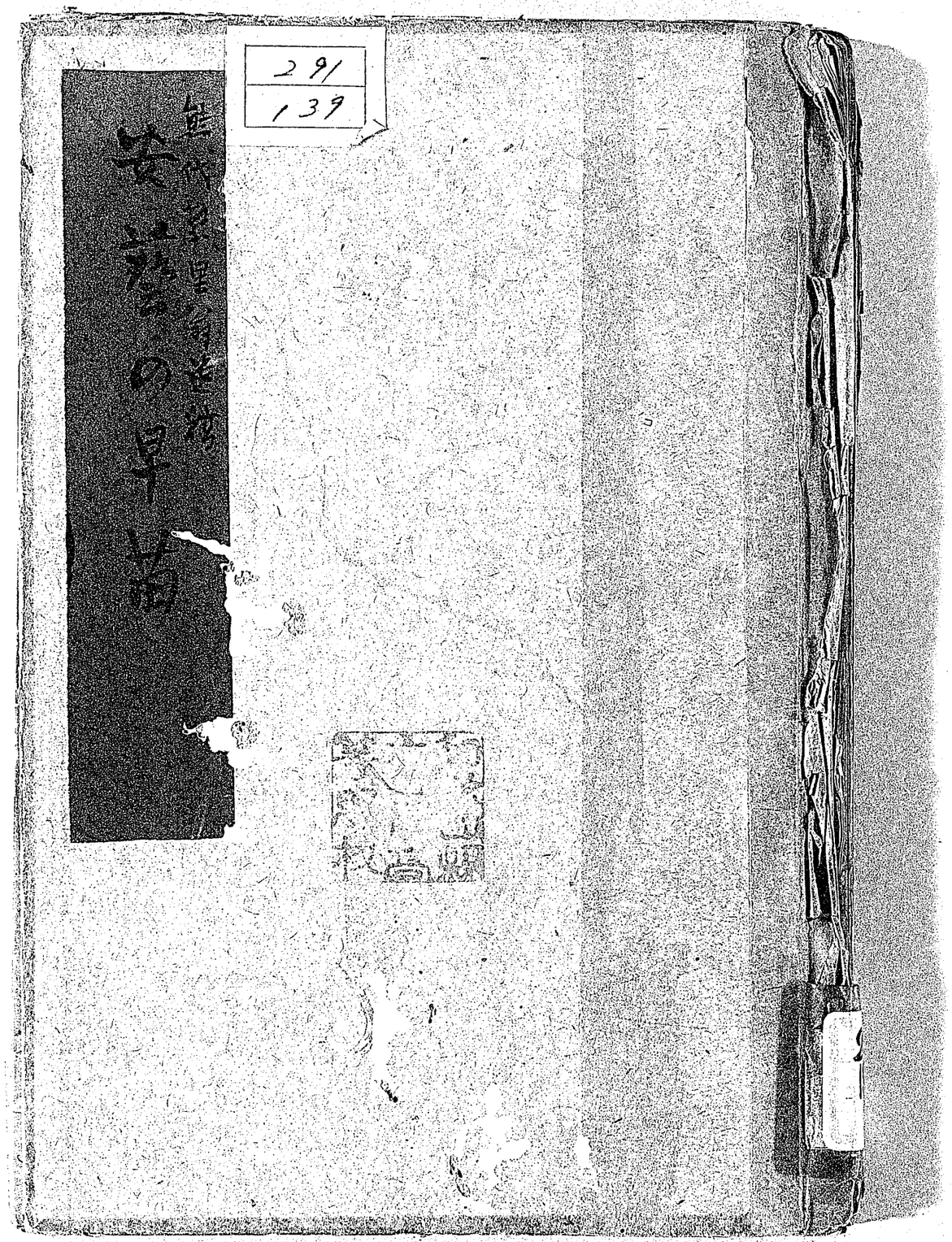


県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

熊代東里翁遺稿

安藝の早苗

91
139

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 04065

291
139
1

中根七郎氏寄贈

石座高校圖書館
28.10.21
蔵書NO. 4065

昭和十五年三月十三日寫し終り十四日に母本を返し禮書を出し十五日表紙影多作りて
此も着け毎讀を始む　されとも外に借りたるものも有れも其方をえらして讀む
非常時に物資乏しく用紙も紙屋を尋ね漁りしに手に入らず漸く從來
官文紙に用ひたる大型洋紙を求め之も有り用ひたるなり
昭和十七年に半紙形の類未だ多くものさへ入る一部二十枚より賣上す　昭和十一年頃
に一枚を原價の取一枚を取扱ひたり　宿し有たるに出来ず

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

291
139
1

中根七郎氏寄贈

古座高校圖書館
28.10.21
藏書NO. 4065

昭和十五年三月十三日寫し終り十四日に母本を返し禮書を出し十五日表紙影多作りて
此も着け每讀を始む　されとも外に借りたるものも有れも其方をえらして讀む
非常時に物資乏しく用紙たゞ紙屋を尋ね漁りしに年に入らず漸く此来
官本紙に用ひたる大型洋紙を求め之を有り用ひたるなり
昭和十七年に年紙形の粗末なるものさへ一人一部二十枚より高くなり昭和十一年頃
に一枚を置信の取一枚平和拙となりたり　宮し有たゞに出来ず

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

旅行日程　中根題章

四月十五日　三谷部立　日高郡原谷泊

十六日　若山三木所泊

十七日

十八日

十九日

二十日

廿一日

廿二日　若山三木所　泉州国塚

廿三日　大坂道頓堀戎橋北詰半丁西

廿四日　堀津西宮

廿五日　今　兵庫

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号 04065

六月一日 京都三条

二日

三日

四日

五日

六日

七日 大坂鉄坊

八日

九日

十日

十一日 和泉信定

十二日 若山福岡

佛光寺辺、祇園社、

岩山、大峯、上下峯峠、[illegible]、和尚、神岡、四条川原、

園山、[illegible]、大[illegible]、[illegible]、西行峯、

上加茂、下加茂、

大津、三井寺、唐崎、石山

宇治、伏見

祇園祭鉾

十三日 和歌浦

十四日 日前部南部帰

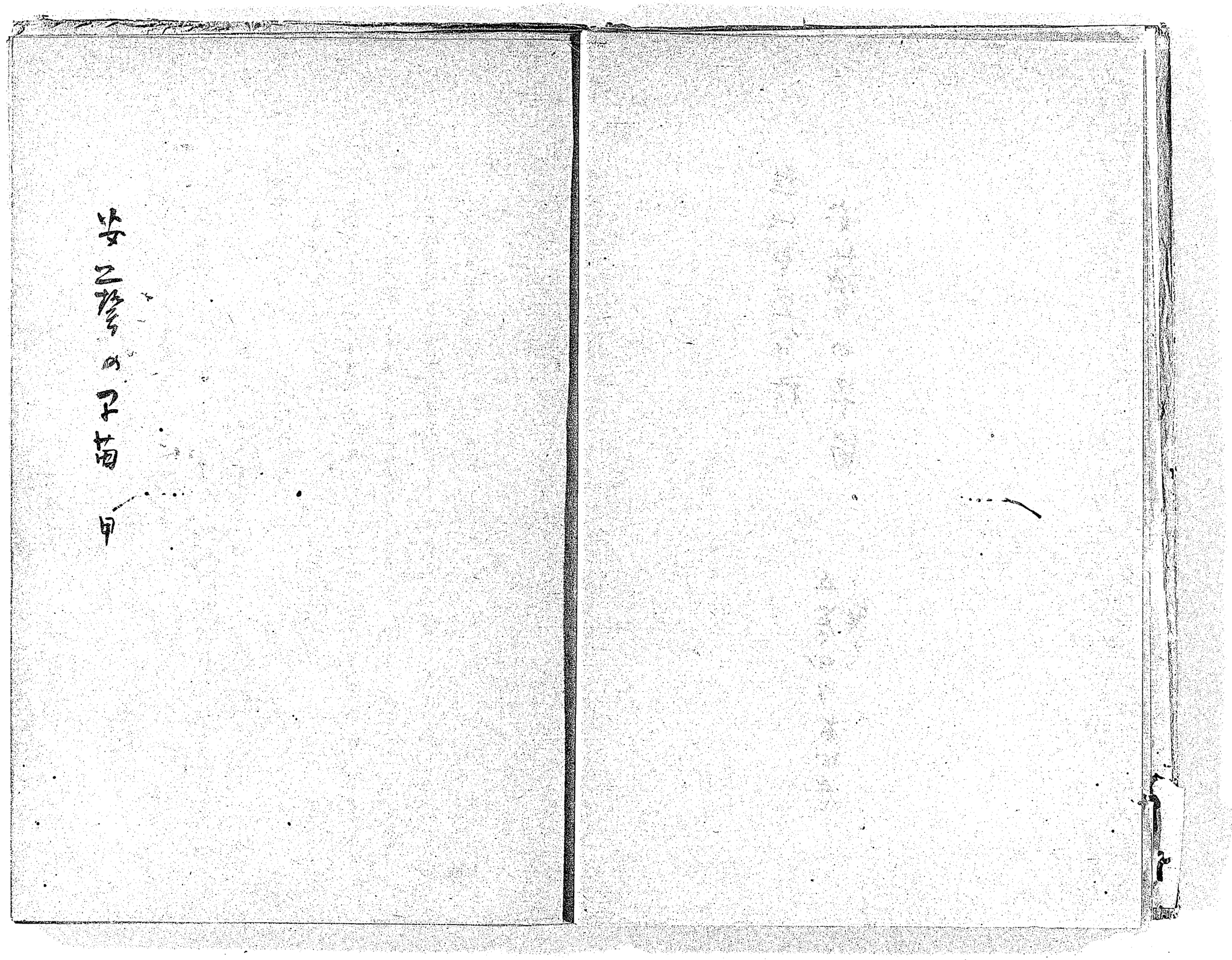
熊代繁里翁稿

安藝の早苗

五巻以内第四巻

ヲ缺ク

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 04065



安二巻の子苗

甲

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

8 9 1 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

ければ

朝ことにきくとなきけと時雪なかねは（ねもきくしもなし）
坂をくだる事道いとけはし蕎い河濱村（今ゴノセトイフ）なり、井関の里も道で
ともの男のいふにまかせて、御道も申ゆゑ水尻城とかいふ方へぞまはる、この
道は糸和山の東の蕎をめぐりて有分川のわたり坂より十里ヶ丁はかり東の
つゝみに出る道なり段村とかいふ里よりそいる、は程道（今ほうず）といふ）糸我
の二つの坂をこゆる事をいとひてなり、有田川水かさいと高しわたりて宮
原の里にてまて、いひくひしもしやすらひて駕にのりて小原越といふ方へかる
こも供の男のたばりてかゝら坂、夏分坂をこえんよりはとてなり、小
原坂にかゝる、この道いとくけはしくて、かちならまかばいかにくるしからむ
と思ふまし

夏分川のをけらの坂にさかしけとかちならねはくるしともなし

この坂の峠より尾渡すに、あはの恵山あはちしまの見るめいと面白し
はるくとゝ小原の手向こえくれぞまちかくなりぬあはの恵山
小原の里宮中の里行すきてやうく塩津坂にかゝる程
つらくに小原宮中行道ていほくの里も近づきにけり
こゝにて駕よりおりて又舟にのる申の時さがりわかの浦につきて
あまのすむ塩津をいてゝ長の浦の清き浦にかけてにけり
この浦りは三里なるが今日は波音かりしをたらうしてことなく浦り着
来をくらしにこゝ、若の里より西の時はかり若山三木町の何茶かもと
にやとるこゝまでは南部より十七里の道なり
○十七日天気よし つとめてさかやきなとして東照宮のみまつり拝みにとて
尾の時もてりかぢ橋のつめより船をわかぐ浦を出る、此間よりものけき
こんかたなくおりしかつれど、西のもしてて雑談のみなり、新もえんよまず

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

とおこそかなり 俗の面ゝ行列の厳重なるさま、いひつくしがたし 一種みつて
ふしのねの高きみかけをかしこくも天ゝるぬくあふくへるかな
通り過きまひけれハ、やこそ掛合をかへれり けふかの家をも帰へ府を待つ
ほど、常磐国家のもとより文来る 拙きアルるを何れと遠くの名所ども
しるし 敬へ至ひしりを
君かゆき 時長 けなかりせは 妹よりも、そまちかてなアかへりすせ
君かゆくきそんをありてふ むしあけのせとのけしほ 深かしすせ
の九ニ日 ひよしつとめておきいでゝ 何くれと出たつよそひすゝほど 有部人何がし
来りそかへるよしいひけれハ、元の話のもと、はた山陰 聖平が方への文とも 相
拙かれするうち、常磐国家の許へ文かつ ついでふかの事こそ至つる 話を思
ひいでゝ、よみてかきつける
立わこれいかなるあらねと 無しけく 思ほゆらくは たゞの常なり

むしあけのせとのはしほ はせ行てはせ出りこんさきそ あります
かそ 后は はうりこそ出で 頃ハ后何がし 敬慎守様 一方同の 高ひ 家
とそ云ふ、 若山をはなれて、日井の陣の 滝りをこゆるを 滝るゝ けしきいと 面
白し
あなをかしこのりれのとこ 幸 なめきそみすほしきわたりなる 水なり
行まゝ山口の里ちかづきぬ 吾山よりこゝまで三里とぞ 此所をしけし 休す
らひ出りく
姉かかん 頃 後のうさを 思ふまゝかれてくるしき 山口の里
程なくとの山峰に至りて
しけりけり 子とし 同辰の 陰ナニ えてる日のかけもしらぬけり
陰たえし 紀の国 家かたつ 幸 かりまのよかけて 名ゝは 立けり
子もとにおりてやうやく 西国 格とて 紀国と 和泉の国との境なる 細き谷

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

川を渡せり（橋）けりにたちまちひとり如法暗夜（法師）
七里をかけて一のこと（橋）けり
程なく山中の里（家）に行つく。
こゝも住（家）くさまの山中の里
信達、相の井、安杖（村）などいふ里（村）を過て信夫の郡（郡）を
すぎ（越）れば、いと（糸）ゞ白き布を織（織）る家（家）ゝ多し。
（名産）信夫布（織）
ゆき（行）けども〳〵（行）尽（尽）ず。いたく（甚）こゝろぼそ（細）くなりたれど、我をこめて（籠）きつ、なき（泣）名
とかくいふ（言）ほどに、日（日）もくれ（暮）たりを行過（行）ぬ程に、
つゞみ（鼓）ある（有）ぬ、安（安）いせ（伊勢）まをわたり（渡）ぬ。
成（成）せ（瀬）より昌（昌）楽（楽）寺（寺）へ行（行）くに、
○北三（北三）ヶ宮（宮）といふ（言）より石（石）ぶみ（文）やうの
あ（有）るのよ（由）かいかなるひろひ（拾）、名（名）けん（検）海（海）つく（使）
岸和田のまち（町）過（過）ぎ、佐野（野）、大津（津）を行（行）過て助松（松）になる。松原
のはて（果）より十三丁（丁）計（計）へれば（経）て信太（信太）の森（森）のくづ（葛）の葉（葉）
訪（訪）ふ（ふ）たり。（信太）森（森）のくづ（葛）の葉（葉）ぎつね（狐）の子（子）なの（名）ぞ（ぞ）かし（かし）
みどり（緑）子（子）なの（名）ぞ（ぞ）かし（かし）
社（社）の前（前）に（に）大（大）の神（神）ぬかづき（ぬかづき）
吾（吾）妻（妻）より千（千）ぐさ（草）の花（花）を折（折）つゝ（つゝ）
あちこち（あちこち）とめぐる（めぐる）ほど（ほど）に（に）、花（花）の綺（綺）麗（麗）
「法（法）師（師）の墓（墓）のあと（あと）、二（二）の人（人）の好（好）みあるべし（べし）」
と（と）無（無）粋（粋）評（評）、時（時）明（明）寺（寺）（時）、白（白）砂（砂）の社（社）（会）
あり（あり）、三（三）名（名）部（部）人（人）のちひ（ちひ）（小）さ（さ）あんだ（あんだ）（会）たり（たり）。仔（仔）細（細）（仔）なし（なし）（仔）
より大山（大山）詣（詣）（陵）をかす（かす）（済）んそ（そ）田（田）のそば（そば）つゝ（つゝ）（堤）なんど（など）（堤）をすぎ（すぎ）て（て）（過）
道（道）ゝ（ゝ）三（三）ゝ（ゝ）四（四）ゝ（ゝ）出（出）つ、（つゝ）、この（この）行（行）客（客）さきそ（さきそ）ちかき（ちかき）五（五）人（人）とゞ（とゞ）そ（そ）、ふ（ふ）十（十）はり（はり）。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

の老人にあひけるに、此人にかの陣陵の方にわく道の案内さと云ふ、そなそのわたり近き所まで行侍れば案内しつくきよしいひて、さきに立ちて申く、上名津村とかゝる所を通て塔の入口ちかづく程、大多の神社ありかの老人は和泉の一の宮といふ、この社は大和武尊にましまして、いともかしこく尊き事はかるきみなどもいふ、もうでまほしかりつれど人々行先へといそぎければ、左右なりけどさて見ぬ、塔の入口まで例の畫飯くふこと、よりかの陣陵にまゐらんとする程ちかき山かきくれて雨いみじく降り来ぬ、アルそそ風まけく吹ければ、大坂にかきそこそ、彼陣陵にはかへるさまゐり云へと供の男とも云ければさらはとて此所を立て塔の町をいそぎつゝ、まゐらんかしかしかみ雨も俄にはあり来ぬ、もうそうければ、今ぞかの心せしゝ、所にまゐらせりしをくぶけるやの半丁よりかゝるのりて大和塔をわたり過て行つゝ

なる里ハいやさ遠からしはるくとさしさかひもいまそ過ぎ

ここより大坂までの間さかく名所ありつれど、つかれたる上日長き比なれば、かの中にすこしまとみて過きつる所々もおぼえ、未付さがりて道程塔をつく、戎塔や諸半丁西何かしが家にやとる、旦塔よりここまでは七里とそ、さかやきなとするうち、三田や何かしまりてしばしかたらひてかへれり、池田喜尚おのれこゝに来りつときて助けてやゞて向来れり、この喜尚はおのが里人なるが、左ありて三年ばかりあなたよりこゝに住めり酒を出していまし学びはた親語りなる里の事ともすゝ語る、但更ていぬ、喜尚もこゝにのやとりまとまとてやとれり

○廿四日宣おくりて一雨少しつゝふる、つとめて喜尚かへれりしばらくありて又来る、夏雨といふ、題まで人々ともによめる

今の国の塔の左山あるち花ちりてさくめのみのに雨おもるなり

さて、こゝより有馬の陽みてらかなたくや、おかまし、西の宮へも行ましとて
道の里殿、日のつもり、やとりの事としいひいて、画図抜とりでて人々いひ
らる、雨止まされども午時よりこゝを立て聖のりてゆく、春尚あま里
のわたりまでおくりきぬ、こゝにてわかるとて
いとしく雨さへふりて別ちの涙の川はしもむすもなし
雨は磨ふりみふらすみひまふあれと別る袖をかはくまもなき
さらでたゞ別れの袖は濡けきをあやなくそゝぐけふの雨かな
あすよりは君をみぬめと思ふも御の名つらきけふのわかれち
思ひきめあのかりねのそとよのみあひみて君をわかるべしとは
さしてかくさびゝありてふとりの御は君を忘れぬ名をこそありけれ
春尚
濡しけき君の枕のわきふしに人々の袂を思ひいてなん

雨やめて出こしあをいまけしとて別る袖の名をぬれける
あやなくもふるの名殿のをしきかな人々をかぎりのわかれならねと
さきくてかくりませなどいひて春尚はかくれり、こゝをわたりて少し行道て聖
の男に海老江はいづくぞと問ふに、かのわたしより路の方なりし内いひければ
口をしけれと立かくりまいんず、この海老江は古人のたみの名のわたりなるよし
かねてきつれつ
ぬれぬとも たみの名の近けれどいさ立よりて雨やとりせん
かくはよみつれと立はよらずなん、津久間の浦しもすぎ、尾の浦しもわたり
まけさかり尾ヶ浦まつく、前にて好よりおりぬ、雨けれたり名殿の宮もおほ
へと西日のかけさめつるさす、やゝ行て聖神の神社の前を過て
かきたくて昔のあとはわかれとも言ふとも殘ることの御設
この神社は往来の道の右のかたなるありて濱辺へは程遠けれど然わたり

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

まれも古くは波のよりけん所なるべく思ひたかくしめるなり、此湾岳を今はいかく云ふらんしらず、このわたりより兜山とか云ふ山まむかひに見えたちかし、おきくてなるなの浦近くなるなど

行くまゝに近くなるなの浦わもちやかに刀をたて名さすなり

西の時ばかり西宮の里につく、大坂より三里とぞ、衣裏湾の沖社にまゐるいと壮麗なり、はたごせの女とも立いでて旅人を呼とゞむる事いとかしまし、やどりとりて後この沖社の里宮なりとも知らいりて古歌に賑へり

○廿五日晴れもてやりを出づ言こすくまりてさりにかし沖前の神をみつく道を宿川、打出、打出川なと思ひてあしやの里あしや川あり、まだきりくらし

水のおとはさやにすみてあしや川そこともわかぬ里の朝ぎり

すこしかきて湾の一方をとり松とて二方立り行所横屋いにわたりをして住

光川をわたるに、海岳のかたに雀の松原とて古いさき松林あり、道の左の

方二丁ばかりに求女塚あり、少し高き所に松数十本生たり、やゝ行て西屋川をわたりて道の左一丁はかりに求女塚あり立ちて見るに高さ三間ばかり、殘るは八間はかりもあるべし、つきあげし石地は二十間四方社もあるべし、湾岳の方くさしいたらはなに二十間社松大やとも七十本生たり、さしわたし二十間ばかり上に石碑あり「いましの小野田男のつまとひしうなひをとめのおくつきそこれ」といふ前に集の巻なる歌をきざみたり、こゝをよめる

をとめつかあはれいくよになりぬらんしまの松にこけむしにけり

をとめつかすゝ君しみきそとは知れの松に浦金をおく

都賀川うちわたり行にこゝも道の左一丁社に求女塚あり、里人にとふに

たゞ大つかと云ふにしてそはさきに求め塚と同しさましたり、おのれ里に

に求女塚を中におきて前は求女塚あり、前に集の巻、うなひをとて

ちぬ男のうなひをとめをしのとひして二人とも死して後やがとも、をと

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

めづかを中におきて二人の男の墓をつくりたるよしあるを見ておりうかべ、ふるこ
の二つの求女墓に此の二人のつかなるべし、かつ求女墓（堺が名所、図に求女墓と書けり）とかきたれ
とめづかと点なるは、女を求むるなの心よりいぞ、中比より文字は
求女墓とかけるなるべし、されもいふし、求女墓にかの二人の男の墓なるべし、
すこし申きて宿屋といふ所にいたる、西の中より三里半なり、晝飯たるべ
なりとて、ここより市川の流みをそ右の方の山にのぼる、敏馬浦左の方する
かに見ゆ、気色いとおもしろかりけれど申きて見ますかりつれど、かの流の方
に心ひかれければ、思いなられとよそに見つゝ、やゝ坂路をよぢ来れば流の
上なる山に至りて茶屋にやすらひて見れたるにおちくるさまいとおもし
たてもなくぬきもみえぬ程にかすしておりけめけん布川のたき
山ひめのみつきと見ゆる宿かねがけてさらせる布川のたき
山姫のおるや手玉の結をよわみ乱れておくる布川のたき

男流女流あるよしきてつれど、古事記のたかに、男流が男流の方をも女
流もここより吉川の境にてるかたもしかありと云ひければ、やがて吉山をく
だりて甘葉の方に墓のあるにとるに、女流に五六丁もあとの方にありぬと云ければ
云ひかねどやみぬ、吉川のほとりを下りて吉川の村にまうづ、社人に宝花ひらか
せて、ちき宮物ともあまたあるを見るに、しくしるすもしつ可ければやみぬ、菓
香の籠の物、掃原井なるいるがあり、林の梢の落葉なつこしく見えけれど
僧侶法流が来すまばとはまし物をとよめる歌を思ひ出で、
秋よりもわかばさしそふ此しまで吉の森もとしくかりける
つの国の吉の森も秋よりも木の梢のおかもさすし
ここより吉の浦新戸の津を左に見て神の里をすぎてやうやうに清川の
こなたを梅相国のおくつきにまうする嗚呼忠臣梅に三日垂とさぞ来たる
一花碑の絵の二品口ナニオの折の木像とてあり、贈正三位梅大明神とおる

しつしたり、係をなみつく

（こゝ三十五家来の終りの行の一行前を終りの行に）
殆をかきかけて消しあり

少しゆきて陸りあり、この川に両方よりつきあけたる小山の如くなるが上にあり、
水にすこしもなし、両ふれも時に時々俄水出るよし里人云へり、けさ西の宮を出
でしよりこゝまでの間所々川あまたあれど皆かくのぬりなき所にあり
俗にこのあたりの川をすべて天上川といふよし未時むかり兵庫ゆく はた
ぶぬ所にやとれり、かの宮屋よりこゝまでは一里半なるを布川の滅に寄り
つれば二里余の路にて一里宮よりは三里にたらぬ道なり、まださきくへ
も行へかりけるを、松梅けさより心地わつらひてなやみけれども、かくやりける
にあれ、まだいかげ有ければ、おのれもこのあたり一見すべしとて、とりの男
と出て見て、つきしまの浦を見つゝ、過て、やゝ行て和田のみさきに至る所所
見るの云ん方なくなれど、殆よまんとやゝ前へけれどいねず稀社にまゐる

つるにいと社長なり、かくるさ平相関の石塔拝む松君を出しより和田の笠松
を尋ねけるに、出て居る人なかりけるに、やうしてとめえて見るに、今はたゞ
かたもかりのしるしにちいさき松一ありたてり

はるしとさしてさたけるかひありてくらこそ見つれわたのかさ松
申けやとりにかへりけるに三名部より松丑、おかひにとそこし宮人のおのれ今
松里に来たる由をきこわけて六七人とふらひ来る、酒くたるの出して行くれと誇
うち、鳥居何かしのもとよりはこれに来とよひにおこせたれば、夜に入りて行
くに酒さかなを出して見てあり、この和鳥居何かしはかねておのれ相知れる人な
るが、かの三名部人も此家にあかひにとて来たれるなり、浅時やとりにあるに
三名部人三人もありおくり来りしばらく誇りつゝ以たり、いと酔にけ
れも帰りけるをも知らず不回目覚めさめて見れどもあたりになし

○廿六日丑時百る比ほひめさめて書よみ日もかく卯の時冬少し眠りてよあ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

鶴の石をもちひてかく、つみめくらして、土壷を千壷つくりていづれの壷
へも水の行からず様にしかけ、五色の花をさして星を祭りたる跡あり
と云傳へたりと云ふ、すべてこのわたりかの市屋を初めていとおぼつか
なき事ならし、かつ星をまつりしと云ふもいかなるや、漢字ならばいに
すへより祭りもせめど かの天皇のみ比は天の神をこそまつらめ、さて
この五色山といふも何とか唐土の上つ代にありつる女媧氏とかいふ女の
五色の石をあつめて天を補ひしと云ふつたへに習ひたるやうなり、こは中
つぶのしれ者がわが西ゝ上つ代にかゝるしれわさのありしおのよろこ異
いつけりていひならはせたりと思ふ、この山に五色の石とて赤いひとつまた
男女の形と腹にわかれたるがあり、さてこそをしらせかしまきて善なる
の道なり、けきいとをしかし、清陰鶴雨より近う見えて海づら見れば
もあかぬ、此濱の松原、こと所のとはやうかけりて 赤木もわかれ木も皆し

くねたるが、かへりて大かたならんよりはおしろしい松原を行つ
をとめ子かすひ子の濱ゆみけ向ふあはらしまねをしつて行かも
をとめ子かすひこの濱の七松かけかゆきかゆきかゆき弱なる
墓石あり、わづか七八軒ばかりの家数なれど皆を称くの休らひしげくていと
賑けし、おのれもこゝを例の書のよくふ、このわたりも今も皆明石
領まで塩の浦より此濱かけて濱藻の浦のつきまで古へは明石の浦と云
ひけんを中つ代ありすひ子の濱と云ふあさ石をこゝは仰せなるへしいま
はたゞいひならはしきたるにつれてかくしめる事り休らひて濱の方をしやりて
名ゆ高きすまとあかしの中なかくにしるめえ居ぬ浦のすゝ原
ここを立て程なく明石すつく浦のけきいとよし
とすし火のあかしのせとはみわたしのしきせとそよく見えたるを
吹おるあはらしまねのしほ風にあかしの浦の松かぬ

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

あの方清き清わるよう時のいやしくに立ちたり見んん
正一位くれ大明神の社にまいらせ村みつゝ
天地と月とともにこのけの道は宗教の恵みに
株山の町を通りすぎて浦にかきて未時下り大久保といふ里にやとる兵庫より
六里半とて、さかやきをとすると、此家に同しくやとりたる旅人備前岡山の何
がしとまうにやがてよいて行先の道この栗田を問ふにいとくけ、夜にぬりて見ぬ
○廿六天気す 夜をこめて立つ長池と云ふ所に至る、こゝは東道と名所道
とくなる辻なり、名所道より申く云ふ里も過てやゝまきて阿陪の
社に至る、こゝより別府にいたる 佳吉大明神の社ありとなる、さて此社の
傍に平松の村とていと大なり木のさまことにおかしきがあり立よりてみる
旅なれはいとも多つりしさねしなが面かけらなる平まくらの松
にて今にたゞ今の床に寒くもやとりやせまし 千枕のまつ

この所まで大久保より三里あり さて屋上のかねとかゝ云ふを見るにやく
こゝも佳吉大明神を祭る 拝みて後かねをみて
言ふの義やさて祭りし一首の屋上のかねをいふ見つるかな
此所に古金の松といふがあり、一本にして女男の色をあらはして二股に
わかる、かゝ女木の方に男の義につき男木の方に女の義つきていとおやしき
木なり
相生の松をしらんれば旅にこゝも きくなれぬる事を悪しき
又こゝに都悪しといふ松ありとて黒人の云傳ふるを見るに大木なるが一
つの大なる枝東の方へ四五間斜りもさしいたり外に笠小枝なり都悪
しといふにつけて枝の斜なる方を見るに古里の方に覚えければ
あなたしさしをしなるそなたこそ和をまつ姉が家跡なるらめ
言ふの里に至る いと華昌の地なり こゝも相生のまつあり、行て見るに大

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

本の都なるが是も同じく女男と二股の別れなりこゝまでも
おもしろきをいやのへよのおさなりこゝもたゞりあひ古の都
（紙ひ下ゝてり）
櫻蔭主人識

安藝の早苗　乙

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

まと屋くいきのまつはら つはら柴千代のさかえをかえくつくすも
はるかなる君がよすひの千年山さかゆくまをまつの色かな
さかへゆくときはの山のいはつゞいはぞもするし千代のよすひも
尚二つ三つよみつれと忘れたれバ元しるさず ワカサ路、ヨコヲなと過て有年川
を渡り、やゝあらず道の左の方に地魚塚といふつかあり、すこし行て申時さがり有
年の里につくこゝにて馬よりおりてやゞらやゞる姫路より八里とぞ
○九ヶ月雨いみしうなる辰時はかりこゝを立いでつゝ
旅衣あめにしをれてあくけそあなうれとこそつゆかれけれ
一時おきて有年頃を二時ほど
行すゝ雨かしとの旅衣雨なるさとの宝の乗しき
この頃ハ一里はこりしありぬべしいとこゝじなぐらやうしにこえて梨子ヶ原にて
一時休らひてまたまく丹頃といふがあり 橋磨と綺前とのさかひなり、おきて

しとい大清

三ヶ石といふ里にて晝飯くふ、己の時さがりより雨やみてこゝよりは宮もやうし
又古れまく 焼山四軒屋をいふ所を過て、春ばうり 片里といふ里につく
こゝより松椿と共に馬にのる 雨も雲もなこりなくはれて金ぐとけけしく宝さ
たえかたく、この馬にて風病すこしさおこりぬ、しけしおきて加賀戸を過ていと
大なる川あり 馬にのるとなりの川と云ふ、この川をやどりにつきて後、
なる男のいひけるも 和の川べの人に問しに梅川といひけるよし 後とまれかくれ
花ぶりしある川やなとそいひあつけるゝ、さてこの川の堤をはるかくだりて後
一場あり、わたりてやゞらて一日市といふ里にて馬よりおりてやゞる 申時過る比
まといふ所へ宝く口地あしかりけれどやあていぬ 有年よりこゝまで八里
○五月一日 天台乳より 今朝も心地もなほりけれバ卯の時こゝを立て沼とい
ふ里を過る時 雑事と下座とかつほうぐとみつなこり時けれも
きすまきひけりさへすりよふこ約よふ若黒ハいまさ春おらし

三

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

たゞれ笠

ちかき程ハ法屋根葺かへなりとて仮宮ようつしまりたり拝みつゝ
日の本の国のしつめと弥仙ましつまりなまず きびつ大み神
たゞれらをまけたひらけしきびつ彦神のみいつはいとゝつすはし
さて新の中山を見渡して
今をしる細谷川のおとゝのみきゝわたりこしきびの中山
まうて墨を夏井宮尚ぬしのもとをとゝふに只人なえさりあへぬ事の侍れハそれ過
しをのち旅宮りまで楽内すべし去ほとゝ来り五ことゝいひ出しけれハやうにかたり
てしばしまちて酒肴そのへ人にとのむ、かの宮の遷宮なりちかきあたり又は
五里七里へたれる里をこちこちより おきまるとて 此比日々暇はなる由きゝけるに
人なりし又おきまるとて車に積かさねしとて人あまた立からうたひつゝひく
酒のみさしてはなるなにいづつかれたる上酒にたひけれハ日くるれはやがて こち
ふしはる戌時ばかり夏井氏より只今なん来五ぐかしとくして云ひおこせたれと

といとくねぶたきるたそかねめはあきなり、こよひもえなんまるらぬ、つとめ
てとぶらひてんとて、使人をいひきかせてかへる
○二日天気よし、つとめておきいて夏井宮尚ぬしの家に言る 宮尚主宮故
主出てあれ、宮尚ぬしハ二三年さきつ方より中風まで立居ゆるまかせぬよし
まで人に逃げられて出ず、宮故主は宮尚ぬしの孫の女の養子まで人の夏
井のあるしなり、例の常磐国家の親に柿岡家の親永平ぬしのおのれの柿
樹のとりそへて出す宮尚ぬしは姉ぬしのたいめなれも
白雲のむかふ書きけ其神のことさきこれ衣を人をみつるかも
とよみてかく何くれといすへ学び頼がたりや陪ふ夏細谷川の事をとゝ
かの其事山か中山まで細谷川もこの山をめぐりてあのまちいさき川とぞ己の
時さかりてやとりにかへりて旅よそひして午時立いでゝ行とて夏井氏に立よる
こはけさあつらへおきつる笠丹そんとてなりこの里をはなれて夏川大内

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

田の里をすぎて大田田の山を南、いと里し、宍球五日市、常江といふ所
をすぎ有木村、こゝは備中の西堺ゆゑこゝより、さきは又備前なり、左の方
に岡無山あり、かしまきて天城の里、先の大内田より常江のわたりまでは
葦をあまたつくれり、こゝはむしろにおる料とぞ、又有木村天城なるのわたり
まは甘草を多くつくれり、天城を過て、橋あり、入江のさまし、たるにわたせるなり
こゝより向ひは小島ゆゑ里人のいひけるに、夏夕木見村尾原村などもすぎて
瑜珈山にかゝる宮山にて登りいとくるしやうしまして登りはてゝまうづ、常社
おもしろ、壮麗なる事、朝につくしがたし、塔あり、これのをばしまおよりて沖
の方を見所すたゞ島のけしきいとおもしろかりつれど、行さきく心せくまゝ、詠は
えよまずなり、かしこ下ゝ所あり、こゝにやとるべし、日もくれはれずといへど、尤
能への海のたづき、西がるくけれいなど人々いひて、いかで下村まで出すばや
と云ふに、おのれも由く、この所はこれまで日くれて道たどたどしくまだ下村

までは一里ばかりの道をよたいりてたどりくまゝ、極さくありてくるしき事
いはん方なし、人々薬ゆもしらぬ方なるにしひてこしも悔しかたりあり、かつ
夫備津より瑜珈へまゐりて、下村は古里の道なるを、今時ばかりの事なれ
は足いたくこゝらにてつまづき折しつゝ、田ノ口村も過て、夷の時下村につく、油屋
何かしといふ舟宿にやどる、往船のり合の人あまたあれどもとより好ま
ざる方ともあすの朝舟の事あるじよびてとひさゝなりして別に一般あつら
へてやとりて、よ事をいぬ
○三日天気より、辰時やとりを立いで、一丁ばかりまゐて舟にのる、入江のさ
まいとおかし、時滅べる海上の塔あまたありて、時やく極のさまことにあ
けれなり、夏たまり、暮いとおかし
他絶てかすむ滅れの朝なきにしほやくあまの烟おもしろ
みるめ多浦のしほやのあさかすみ、かちき世渡る業とも見し

舟出するみぎはのいとなみよりつゝみよりめぐりよりしこき行ふねのうすみなるけまいはけん方ありさまいはけん方

潜わたる舟ばたくらなしつゝ

舟くゞりのきだは、つゞくをみなけれ、またをみやりも、向ふかつけをつゝみきくひゞきのおたえやまりまなんつゝおくれ、しばこまぐみ見わたしのけしきも、詞もつくしがたくくさにちけんくと云ひつゝ見ゞ僧は内紀の里もやゝちかつゝくをみそれ

る船

一日ならず心ぜんのしあくこゝき出てさぬきの子ちかんえんけり

この向ふ西南の方あつゝ紙をいと多くしてかたしえんに海くもちまでこゝゞゝゝゝ

[illegible]

採み終りて

五もよし　さぬきの子　こもまくら　高きたかねに　雨ぬれ　しつまりねまを
大神を　拝みまつると　五百重ら　たゞにこえきて　千重ぬ　やまくれたりて
ほとゝぎす　鳴や七月の　げ子の日の　朝きりこまり　草　枕　桜のやとりを
朝とりの　朝たちいで　子としかす　山の桜みち　発りたち　言みさくれば
みね言み　こそ棚引　しくしろ　しにおひたる　八十にぬれ　蒸氣しけりて
云つたる　日のめも見えず　かたしけて　やつまと居す　三垣の　みのまゝしよ
三ならふ　大宮に　つきつきに　をろ思ひをて　神社の　大廣前に
ゆう自由　うなぬつきぬきことあげせぬ　五ちはあれと　おもこちに　言あけすらく
二年けく　もなくかしこ　恵うしみき　恵ぶ子ともに　父母に　さきくてあはな
神ますらせ

子としかす　山もとろにくおくの人そ　まるくる　朝よひとなく

神社の内又はこゝかしこにある僧ものかねうちなりて、どの僧なりしすべてのさま
行くれと伸めきけれは、いとかたすらいたき事におぼえてかしこけれと（略）
辰時さがり　拝者にかへりて　朝飯たらべてのち、三名部への文ども　松樹に　芳に
かく、巳時こゝを　立いでし　やゝあきて　三角一寺に　まゐる、五層の塔あり　発りて
みるに四方八方遠くみわたされて　あかねどいと　旨けれは　思わなくまで、やうて下
りて　屋内の　御伝語大師　誕生の　場をいふ事に　まゐりて　菓子ばし　休らひ
て　立いで、行々、丸亀より　舟にのりて　備後の　鞆にやわたらん、安藝の　嚴島に
やわたらんと　語りあひつゝ　おろにさぬきの　飯の山といふ山近くいんえたり　こは　俗
に　富士といひて　きの子舟の上より　僅よりも　所なりて　見つる　山にて　所ちがいの
ゆゑにとよく似たりとなん

　前の　物物　面かけうつせ　山又れは　又しのはるし　本路の　空
中　西路を　行くからに　本路をしのげんも　つきなき　心地すなと　ひとりごつ、やゝ行て

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

棟の花のいと面白く咲たるを見て

なつうしきいろなりなつりおかゝる妹にあふちは花こそありけれ

未明ばかり丸糸につくけるは墓通宇の方へ廻りつるにより三里半ばかり

とぞ きの家立よりつる舟やとおもきて、あるじをよびて倚屋の箱へ後る舟の事と

ひきて、舟ちうぜきす、この間雨すこしつゝおりいづ国のつとまとて国府をたゞ何

れとおもとのくにへやる雨止まざりければ浦海の事いかゞあらんと思ひわずら

ひなづら船頭よびにつかはしてやまもどこずこゝかに見わたして

万代もありかよひこん海山のみるめをかしき水かめの里

かくて日くるまで雨やまざりければ、こゝろひまこゝろやどる河の又なりしと狂に入

りて家主の時はかりねきめて、みと思ひ出してよめるこは若山にありける船

掃国をきく置くる小古何おしの井陸奥の古事の秋聖藤陰の宮若山

を通らせ玉ひける折 後鬼の夏名工とかゝる男のあつらへて宮の無

理にまうでさせ玉ひし事をいとかしこけれどよみて與へけるにかの夏名工この

歌をかゝなりけるに陸心にかなひ玉ひけるにやあらんかへらせ玉ひて後

天皇に供へしに寂感ことにふかくましまして御衣物を賜ひ茶にそめてき

よと勅宣ありやられて西陵の一位の君（紀伊前大納言者）の又とへ下されければ、やがて

陸奥に玉ひけるを此夏その歌の事を玉に所々のへにあつらへてよませける

よしいひて宮へ奉る初のれもいまゝあへぞなん

ことのはも玉のひかりも万代にかゝやきぬべき神のたまゝ

よにこえて たのきことはの花なれも雲なまそえかゝりみちぬれ

万代の陰をみるおほきみのめくみも深き つゆの玉より

さて文ともとりいでゝよみなして寄時はすり又いぬ、こゝろひに蛟いと多き

に蛟根もなければいたくさしくひて、たれしもわひなづら、ぞ、しげしね

みりて卯の時一日におきいづ

○五日雨をしみなくなる　舟のりすぐくもなければ人をこし方なる里の事ともかたりいですぐるにあけれなんうちなかめて、今日は家にあらば節の事もとり行ひ大はた且るどちおかりて部をもよむべきをなどになつれしなるまゝ
ひまなく且ひつゞけける

なる里をしのぶなかめのつれしに今日はあやめのねこそなかるれ
なる雨にしぬるあやめの雲をかけはかりなく軒の雨そ悲しき

かくて又なを取いでしよむ　未時さがり酒肴ていとも　けふの程ひがてらにそのむ酒時はかり忍びていぬ　家は此かりめさめて又みよむ、いたくなけぬれば　すこしねぶりてつとめておきいで

○六日雨はる　辰時はより舟にのりて備後三郎の津へとさして後る湊を出るほど
みなとはのむやひの小舟つなときしおのかさおしおひらきする
今日は家に返をいとはやし、船頭は起の近年なりといふ　此間鈴の付き

いとおもしろし　喜鍋（マナベ）　塩飽（シマ）なと　西行法師の鈴もしよみおかれけるおたりなれば
いとあけれなり　此間の鈴いと多し　松樹も悪しくかきとめおきたれと　おのれもしる
さてやみぬ　ともの鈴ちかくなりければ
あつさういて舟もしよ青たかくよふきこえたるともの鈴おれ
未時ばかりともの鈴ぬつきておりてこうかして又雨しつ
うち矢もをさまる　御代と言ふてぬ　ともの鈴おはあた　鈴なし
いましつのことやとはすしともの鈴にはは家ちろの木、今もありせば
墓居をいひたるべし　後鳥の社にまうづ、こゝもいふ　海上に入口に小舟の行
再にかきまいとおかしけれ　小松田大臣の古跡といふがあり　行て見るにち
いさき社手筆あり、かたちこと異なりつくり　なしたる松のをかしきがあるをと
ふる内大臣のみ自らうえさせ玉ひしとあれ、かくるさ保命酒をとくのくて舟
にかしうと　又屋の道の方へとおたる　この間いと　なかきせとなて　数十里つゝき

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

たるよし、しばらく由きて、阿不琴（アフロ）の観音祭中より延拝す、このわたりのさま画すうつしがたげまで、いとあけれなり、風なきけれどから橋とりいでぬ
其屋の道までの間すべて匂山のけしきをかしき上、いさりするあまの小舟の所
かんいとまなく、塩やくけぶり、宿舎に立れたりて夕浦にあさるかまめの声
とりにあかれどけぶりは心地よしあしかりけれど給ひえよまずやみぬ尚此
むこう屋の道につきて宿れりいとく繁昌の地なり、成瓶より新まで十二里又
とりこくまで三里なる油あすの日和もいとよしなどいえかけつゝいぬ
○七日天気よしここを立てよし和木原なるいふ里をすぐこの海岳の入るめかり
そめたりずやゝ行て糸崎うつく、葉居の女にこは何といふ所ぞと問ふに答
へたれどたしかならねば二度みたび問かへ其糸崎といふ所なり、然宿を
長井宿といへりといふに、さてはきゝまくなか井の宿かとて見るに道の右
の方に八幡宮の社ありすゝりて見るに不研あり糸崎長井宿なるを忘りつ

けたりけ思ふまゝ、
いと嶋をくりかへしても長さらば長井の宿にしらて過ぎ
宿舎を見流して
はゝ西の宮さわかぬ表かよの長井のはすなのとけかりけり
立よりしみる袖すじいと嶋や長井のはすのまつの下聲
葉居なしばしやすらひて見るにいとん方なく面白し
うきまやあかあの宿のおまふ舟おきのみるめのいつもあかねず
かつ申きかつ立とすりて
行方もあかぬみるめに忘られてうつも長井の宿つたひかな
やゝ行て三原の里、城あり、こゝを竹道て道の右の方に八幡宮後岡社あり
かしゆきてをこたてこゝの山も備後の西境をこゝよりしんにあきの国なり、廿
丁ばかりゆきて木の宿といふ所なり、萩野こゝを里人はをざつといふをざ

二

ぢなるべく思はる、さてお御川の堤をゆくいと長しからうじて本郷の里につき
て、しばし休らひて御川を渡る所川に橋はなしたゞれたし再さあれど妹
なる川の濱たえがちなれどかよひがたしとて渡さん、せんすべなくてともの男
おひて渡る、こゝを過て山路にかゝれり所山二里以半ばかりが程人家まれ
なり、いと心ほそきに十月つゞしをかしく句ひてよぶこ鳥の時けれど

よぶこ鳥今もよぶなり十月山句ふつゞしに春や雅なる

申時ばかり新庄といふ里にやどる屋の道より八里とぞよふ入りて湯
あむとて老婆のしるべにつきてゆくにあれたる田のかたくに風呂といふ物
をすえてあたりは圍だにあらで湯あむるに堂あまた
とびまてらすさまをかしきまで湯あみたゞら二つ三つとりて供の男を
よびて紙につくませて尚あまたとらせなとすゞしいねたり

○八日宮おくる命の時おきいで、朝飯くふとて昆布ちさきり河なる大根

なとまし一煮たるをすゝりたるうつはの底にあやしき物ありけれ、箸をとり
出しけるにえびかつらの實計なる蝶蝶のにえたゞれたるなりあり、俄に
心地あしくなりてくひさしてかくなるといふ事同じ鍋を煮たらんものを思ふ
におのれらも口地あしとて人々も無とりいでゝのむ、さてここを立いでゝ由く
もあるいみじのあるじかなとつぶやきあひつゝ西村、田刀里、小石立、大石立を
へて石立坂にかゝるこのあたり郡花いと多く咲たり

春も猶のこる雪かとみ山ちやいはねのうつき咲白ふ此

雪とはるよそめもあるを咲色にかさへ涼しき谷のうの花

さて石立といふ所にいたる、よし休ひて松子山といふに繋れり所山一里
ばかりがほど人家にたえてなしいと心細きまゝ行つゝ

山の名をまへにときくそあはれなる家なる姉を見やりつゝ

この山村の木いと多しかつ蓮の古左みねも谷もつゞしの花咲みちて紅なら

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

ぬ方もなしよみめつらしきつくしかなと立とまりてなつくつゝかく
いなつゝじ、たれをまつこの山もせに思ひこがる、絶にさくらん
いはつゝじ行き余れ、はなこそまつこの山はこゆへかりけれ
けれは胡よりくりて雨にやならましと思ひわづらひけるに、この山をこえすぐる
ほど空はれて見る日くまなし藤なる西條といふ里を過て巳時さがり四日
市につけりや、由ふかつえ坂をこえて飯田といふ里をすき海苗の大山に
かくれり、此山も一里半ほど入るまれすてあふへなしやうし姉すぐるにいと暑
きことたえかたし、あつぎくしゆふ海苗の里の入口まで
許川の海苗の里の宮は相結びていでやあつさわすれん
ちいさき川はく流れたり、かきくて下海苗の里もすくる雑太郎の音物の
音とりく近く聞えけれはいとあやしくて行て言する方をみるに里人の田を
うゝとて男女十七八人も立ましりて歌うたひ拍子とりつゝうゝるさまいと陸

らしき事に思ひけれも立とまりてはいるゝ、はいすとし画成なる大法といふる
此五人の三名部にさるゝ、あこのまゝの田植る折の事なと折に語りつれどさ
しもあらじなと雅ひ且ひしに、人ケまきめに見てぞかの雅ひははるけていと
笑しうなん
おならすつゝみのそくて万代と歌ふうえめの寿きほふなり
さかゆかん秋をたのもにおり立てうつやつゝみの音もかたけし
今日から服ふさ見るにもさのふ本郷のわたりまでつゝみ田のねなどきこえそう
たゝみ寿のかまひすかりしも同うゑすてぞありけるよといひかはしつゝ申く西時
海田（カイタ）の里につく新庄より九里とぞ宿りてのち古人のありけるをよびて肩れ
せつゝ、田植の事とて語り出るにこの古人したりかほまで、吾国まは皆かくの
如くこそとおれたけく云ふに語ふ歌はいかまとしばうたふ、いとおかしか
りつれどわれしてかの歌も粉樹かきとゝめつ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

○九日天気↑雲の時ばかりより雨きめて風の内を青気みだす卯の時なさいだく行くれとよそひして辰の時立いでゝ、やゝ申きて磨鈴ふつくいとく眼附きに海山の氣色も一方ならずなかし

行かひの眼にのみかゝみやまのいるめもあかぬひろしまの里

本川本多橋ちかく屋行かしめといふ舟宿に至る、ここまで海田より二里とぞさて最鈴に成る舟の事をとひきくに沙の潮干すのりてけふは粒子へらでは舟出さずといひけれバしばらくやすらひて晝飯をくふ、ここより一里半斜行て京津といふ所まで舟るのり至へとあるにの言ふに任せてこゝをいでゝ、草津に至りてやがて舟にのる此海岸を発せすやゝこきいでゝ

舟出ある草津の沖の岐岡より国の見えそめぬいつくしまふ

左の方に廿日市、地の帯前などいふれたりを見つゝ申時さがり最鈴につく、かの地の帯前といふは最鈴大明神の象神の帯根所にて五月五日より六日十五日まで此所にゝつしおき事ことなんいとりてくしけづり湯恵なりしてよふへりていぬ

○十日天気よし つとめておきいでゝ湯あみて後ありどをよびてこの鈴の事ともとひきくに付れとかたるか中に鈴回りとて此鈴のめぐり七里七浦をめぐるに永よそひいと最重にとゝのへ、供舟をそへ神司ハ別に又舟よそひて如れこれ合て豊艇社をこぎ行て、七浦の社をまた神司所稿ありかつこの七浦のけきことにすれたるよしきくて

朝し深の夏ちのとみに永こけていさめくりみんいつくしまふ

それと行さきに心あれなきしてやみぬ、いとゝ乃ちに屋ともあまたむれ居て、人のおこりもおそれすよりまてくひ物色へるさまたれハ、たくろ鈴とり出しそゞるにいとよくくふ、は時の舟よりあかる時よりかくしつゝたはぶれけるが、かの屋ともいとしつすきをいんて

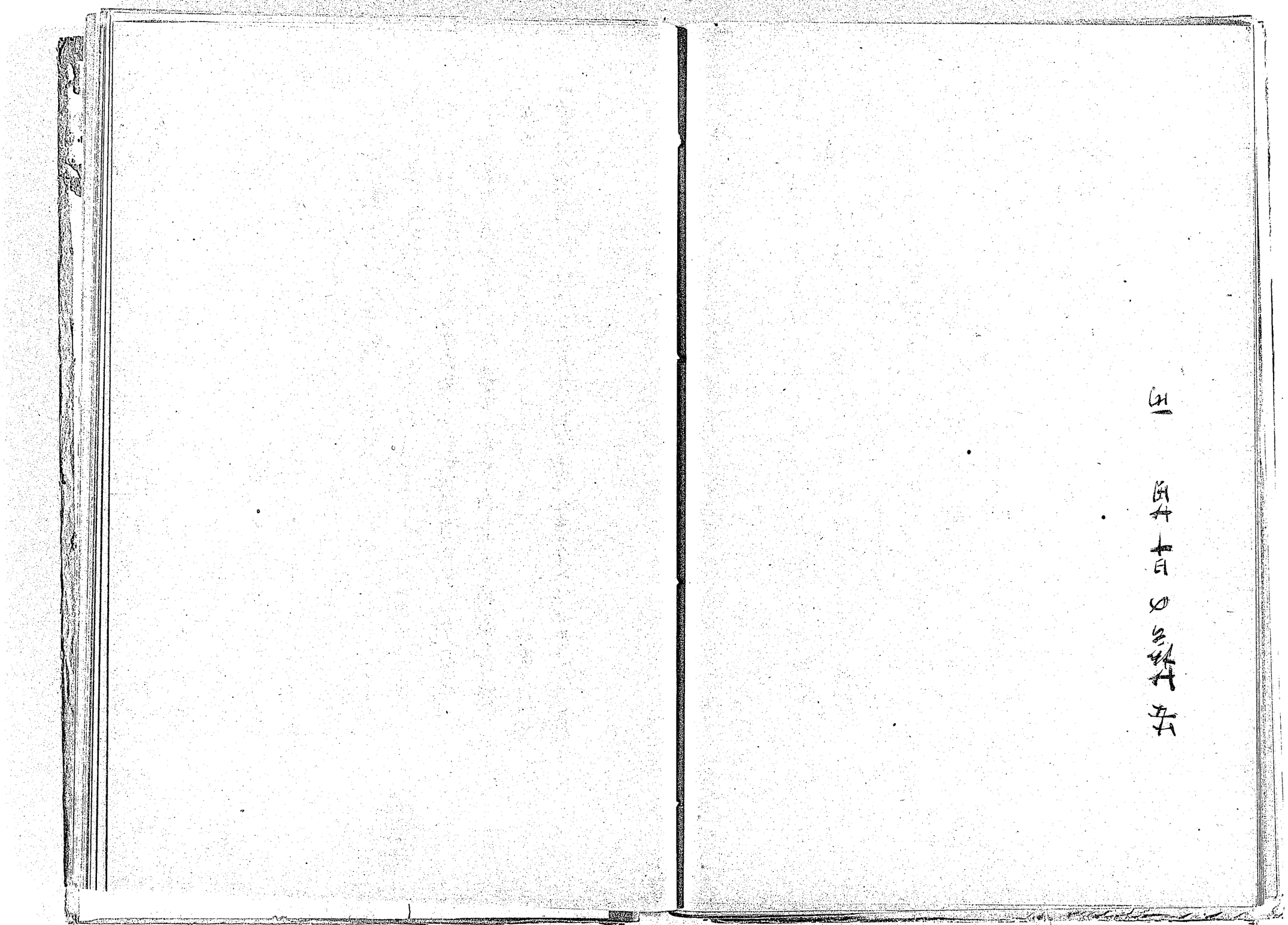
県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

むつましくあそくるしかを見てもしん友しのはるゝ様の宣かな
庵と猿とあそくるを見て
しきいます神の心とむつましくいそはひをるよさをしかとする
この二つの事ハ神のいたくめで玉へるよしき、俳れハかくよめるにたれ、さて
東内の者を存ひて彌山に登る新山いとけすし奥院とかいふみね
の寺まては卅丁ばかりもありとぞかしをるに白糸の滝といふがあり、ちい
さけれどおちくるさまをかし、やうしまして家ハ計りに至りて茶店に
すらふ、この東内の者ことにくはしき男を何れと語る、うるさきまで
をしふ、こゝまての間にある所にあまたありつれとことゞくはしるさず二王
門に至るに前たる茶店に女どものあまた休らひ居たるが中に年の
こゝ二十はかりの女のみめよきあり、よくゝよりて見るに四年計りあなたに相
知れりける女なり、女もさとは知見なれと人めをきをや憚りけん、あをも

いはてたゝおのれか方をのみ見るたりけれど見かけつれと詞をたにかけ
て此門を過つゝ
且ひさめ絶し月日もはるけきに茶井へたてゝよそに見んとは
別れとはいつくしまゝいつかなと又しのはれん面かけすして
（此下内ゝ）
桜落主人識

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 04065



それより峰の松原を何の路元の岩そきわく有る所ことに多
しかの草内の岩集の此五十計りかいと白のまめ草男女何のころ
さまざまそこそこおもしろくおもひきて
いつるみ、いたり息一たまも又をかし
事にて宝つの時間も持なくすくさくすくさくすくさ

はるらず放ちも

伊舎利三宮宮なと云ふてありかしてありて三界神の社と云ふに集る、さて峰より下る折もこゝかしこと多く集りつれど例のしるさず午の時旅宿に帰れりし時人々をあがたりなどしてゐたりける程に加の家直はせく来て御年始あれとすゝめければ御社にまゐらづ社集をそ来て御宿にぬかぐきつゝ

由ふたすき かくる程をはふらしさすらせ玉へいつくしまひめ

さて百八間の廊をかたましも見せ由ふ かけたる御馬何千といふ事をしらず大荒よりはじめ

左右のこの廊の間ごとに家直これも何かの事これはくれかしのかけ事なるを無しく敬ふるを見るに、けふにくすくたくなる物をもあまたあり

ことくらはみつゝし難し御前なるさしいでたる所にた廊より見渡すに山より海かけてけしきたぐひなくよきまゝ、よりまゝ御きまゝもあまたなれとつゝ難けれどたゞかくよめる

海山のあはれをいくら神なりつゝくすけんいつくしまゝ

大方もきしにおとるならけをひとりもれたるいつくしまゝ

人とすゝいふ語らんことのけしけて及はぬいつくしまゝ

神なりけるとよろみて宮けらいつくしまゝ三けめけん

さて此御は神の帯也を御干沙汰朝日夕日の折にたつけて日本七度御菓のかはる程今朝あるじの云ひけるを思ひいで、

朝なゝ夕なしほひしほひたゝかはる考めはかりもつくす

それより紀姫山といふ事に参り千畳敷といふつり殿をし休らひ、かたへに五層の塔のあるに来るこの塔は心木なし、申時旅居にかへりて周防国岩国へ流らんとて拝よそひとりつゝろひおきて、あるじとかの家直とをよびて何れとと云ふこの大神の上にはいとしたゝかくしすくあり難き事の要をしるす事暇なし、あるじ彌山(ミセン)に登り御社まゝで事なかくすみける程とて酒出

看おまたとくのてましけれハ昔に春もりて浦づにいでく、かの岩国への
舟にのる程
あすすりハいつくしま山しまくも忘るゝまなく〳〵ぬ生れんかも
舟にのりて見出すに月はおやかにすみたり此島のけしきことにすし
名にうきいつくしまねの月かけをあけれこよしも和かめつるかな
やゝ見つゝ行て程少し思ふ程
うち里の夏に迄ても見つるかないつくしまねの夏の涼の月
程やゝ夏に侵ぬぎめして
うち里の夏のかよひちとたゞして枕にさわく波の音かな
夏の夜ー波の枕にうるさとのそら里はせてすゞ月かな
又眠る夜の時はすりおきいづしばらくありて周防の国新清といふ所に船つく
こゝまで五里とぞ

○十一日天気より朝飯たゞべて舟よりおりて今津の里を過て岩国の
城下につく、こゝまでの間所々に麻いと多くつくれり、かの新清よりはおほよそ
二里はかりもありとおぼゆ、名におふ錦帯橋のつめなる茶店に休らひて
やゝ見渡せ此茶店のあたりを錦見の里といひ、この川を錦川といふよ
ちそこの橋を打ちたりつゝ見るにげにいとくすくつくりあてのでたくたぐひなき
橋なり鳴る岩とか云ひてさまことなるか上つ瀬の方にありやゝ行かへりつゝ見て
これやけ子神のおらしゝ行き川わたらせる橋もたくひなければ
又もこん川もすまの名にたちてあやにを行き橋のみわたし
こゝより丑寅の方に岩国ありて一万石萬石のある郡を囲ひいでゝ
いすゝに人のこえけんすなくなるいはくに山に殺さひにけり
同じ方少しかなりて宇津山城をいふもありこのあたり柳いと多くこゝを立い
でゝ帰るさ今津の里まで塩やく家に行きしやくかまのさま塩浜のわたりかれ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

これ見つとひきなりて午時さがり新津に加へりてさきの舟にのる、やごもこぎいだして蒼翁へとちしてあたる 近手の俗より 近手は長門伊豫近手は関防安藝の俗に峠によぐらいねつれば ちでありけるを、今るはみつ近るにけしきいと面白し 松樹例のごとく新宮にとひきて かれは何の翁何の峠何の浦などを悉くしるす、最翁大明神の歩前すぐる程ど選拝す、かへ時る近き所なごり 幸ひ拝したる 大元明神、長濱の衣比須の社見えけれど同じく選拝す 大神の歩前をいたるにもあらり見つ、かしこきみいづの程を思ふにも行末ちきくあれと心にのりづ、いつくしまも行近る程

大神のおまへの濱のかまつはらそれさく見えずなりにけるかな

申時さがり蒼翁につく、新濱よりこゝまで十里とぞ 有多村のつめよりあがりて 多産丁とかいふ所るやうなよりいりて 蒼翁につく 新濱よりこゝまで十里とぞ 有多村の正稜かもとをとふに、おき程をあとよりかへりことすべき由いひおこす、こはをとひ、此里をすぎけるに

折立よりとひけるに家にあらさりけれど、とひこししるしをとて、常磐関翁の詠はたおのれの松樹のなりとりそへて稱しおきけるが、こゝにも此里にやとるにつきて折にふれて いひつかはしけるにおん 物忌て正稜かもとより人来れりけるにおのれはうまくねいりたれもしらず 宮時はかりめさめて見るに枕心に書あり 稜 状なり 松きみなる正稜かもとよりたり、一日ぶらひ立ひける程は物一まかりて元封重玉はらさりし、おらいのつみは申るし玉へ 水へ稱しおきを一る場所とも かたしけなきよしこまくかきて 苦者あハまるらすとあり 何の書ならんと見るに最翁絵馬鎧とてかの数かぎりなき中ゝて古へよき絵馬どもをぬきいづ、其形をうつくしるうつして 画も画書は書とありのまゝにしつ且かけ事れる主まだ筆跡の事まぞくはしくかきたる書ゝて五巻あり、これに詩をそへたり

うつし絵のあやはなれと いつくしまいへきそ二ゝ君にとはれん

口

とあり 後醍醐の御事あのよろこばきこえ家かくとて 次第によみそつかはし
けり

うつし丑のあやある 君が玉よのはいつくしまねのひかりとそ見る

○十二日 宝おくより雨ゆしづ、なる 辰時やどりをいで、城の西なる 川のつゝみを
発る 此里をはなれてやゝ由々残国の里 道の左の方に残国の社あり又
すこし行て 感心院といふ社あり 冬る 古市の里もすぎて 緑井といふ里を
由々はじ 雨しきりに降る 此あたりちいさき 掛小橋なと多し 行つ、
枝たるゝ 竹の山かずの 深ちりて 雨ふいろそふ 又より井の里
かけとめて由々袖すし 雲ちる 木の山かずの 又より井の里
八木(やき)の里をすぎて 可部川を 山たる、可部の里 廣崎より四里とぞ 雨やまを
ふる

あまつみやどりやせましさとの名の 恋しも 妹の見えもこそ見れ

されどやとらりき、こゝをいでゝ 人王紀山 禅王寺といふ寺へまゐれり、こは 紀の
国千里の浮の硴石(サシ)といひて 伝聞あ 絵ゝも見えて、その外何くれの文も見えた
る石の此寺にあるよしきこつれどなり、すこし行きて 右道も由ひで 左の方にお
かれたる道より 五丁斜り行 薬師あり こゝより二里門まで十三丁、此間三石
のしるしありけはきこと たゞ板をたてたるかとおやまる、雨ふきりこめて
行さき見えわかぬに たゞうつ、からにじて 二里門にいる、さてもけはきなか
なゝ、よしかくもあらじと思ひしをといひかけて、又せしの浮りて 鎧寺 無量大
神の宮にまゐる 無量大神の宮と見るも 古里の宮こゝひしく 打ぶのおれど
きりより 宮小雨の袖にかゝるもあはれなる 山おかくの浮りきてはいと心ほ
なり 雲にもきて 探む方知、薫ゆしてかのさぶれ石を見んとこゝに 法師いで
きて 寄荷にてもなひ力く、土の氣をひらきて 中すはかの石ひとつ 掛のせ
ていとうやしくしたり いりて見るに 紀は 白くまゝ 又なるやうなるまことに 古き

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

鶴田をすぎて八江といふ里を行けど松樹月原をとりて黒くこれにうつれ
はいかゝいふとなるかまつかと答ふ是ありける鶴柿園をもぬたり
の席地の幸福なるかまつかの花の事いひいでゝかれこれ論らひけるが今こゝに
てきていよく九まつかの花も月原なりと松樹とともに降りあひつゝ中く此里
のはづれに川ありわたり頃にあらず雨あるべし

はやおたをみかさまさりにうなくし、八江の里の五月雨の比
長堂棲り、お宮堂（モドカヤ）、梅原と過て吉田の里なり、茶店に立よりて川舟にのら
んとて舟をよびにやる、畫のおくるへかりけるがあまりにおやしき家たるまゝ、こゝを
立ゝ、帛（キヌ）川の川原をくゞ、やゝありて舟とゝ来りけれども無ゆあたり元祀
ましまず下るに岩の上に鶴のあるを見れば

きぬ川やはやき流れの岩の上にあそぶかめのゝとかなるかな
下吉田、四軒屋、大江元祐ぬしの城あとをとゝ見るやゝ下りて

きぬ川の岩洲の波はゝはけしきやすけき舟の上かな
宮居、小原、一ケ原、宮田原、黒原、獅子田の城あとをとゝ右左に見つゝすくるに鶴
たり柳いと多しけるに桂川をすきける比より雨名殊なくはれて、日も、黒さ
にたえわびつゝ此居をかく所といとすゞし

柳かけきしうつ波のすしさにいふは心も申く舟頃かな
下り行くまゝつゝ水にたれも眺れり、この間まきける所の名をもきかねず
しらぬやありてゆさめぬ河波居、吉我（アヲガ）の里右左に見申、こゝより下をアマ
ヒキ川といふ、このわたりもけしき面白し、申時ばかり三吉（ミヨシ）の里の川原につく
こゝより三丁ばかりゆきて三吉、十日市にやどる上根より吉田、四里吉田
よりの舟路も六里とて、この十日市も備後の国なり、茶店の西堺い
つゝなりけん、さきやきをしてよくいりてゐたり、やゝ裏の外面を見いたすに月
法し

雲きりはあらなくけれてこよひこそ〳〵みすの星の月かけ

○十四日朝ぎりなかしつとめこそを三ツ やゝ曲きてきりけれ日さしいでたり上の淵原と云ふ山をかく深き麓の時にたるを見て

山三百くさまたらみねの氣をみ時曲く都のすゞすきかな

この山の上なる原に馬を多くはなてり望あるのさまたり

夏の草の露にみれけんあらこすのあさるよそめもすゞしかりけり

法山一里はすゞ家たるとなり上の淵村上の淵山この山は山ちさの花いと多く白く匂ひたるがおもしろく覚えたれも

くくのちの古墓の花たちいてゝ絶もはえある山ちさの花

やゝ曲きて古布望村左の方に八幡宮、和歌夜代雲、神主殿に祭れり、このわたり田ゝ花頃はしきれど、さきの日の如し上布望村の道を佛が多和といふ山あり、この山一里半ばかりの間例の人家なし、又馬は多くはなすり、この山を城と横谷

を畫のおくなへンバラ坂といふをこえて靈市といふ里すぎて峠とかいふ山をかくれ一里はかりの間又家なし いと異きに道さくけすけれは苦しくていきつきつゝあたりを見るに卯の花あまた咲たり

日をいたみ山路さすみ卯の花の露の落すも袖ぬれけり

あせるをぬれたりとはさくこえなんかこの山の峰に無名あり絶是なり滴原法是有蔭然頭御神樹谷村とあり なれば さきに畫飯たるべける所より

こゝまで皆樹谷まで室市といふ峠と云ふ山村のうちなり、この峰なん高塔なり、こゝよりあなたも出雲なり ちらそしはらく行に、赤山へ（俗に赤名 ハ云フ由）と

いふ里につく、家居にやすらひてあるに、この里の名をとふにこの西平里は所に山邊赤人の出生の地あれも、かの人の出しよりの名をも赤穴といふ、こはいとゝ

おき事なさしこのわたりをこゝろつゝ木といふを見るにみなく杏ばかりなる本にて白き花咲たり梅の實の如き實なるよし味ひよしとも さて望にいふ卯の花のと

いふ木の葉をは葉るつみを用ることかこゝより馬なのる如市屋の坂をこえ三口
市をすくるに田植あり、こゝまでも西藤の国の如く賑ふやとと云ふ、かの国
はかりはおきはこれで都本敷笛柏原木を用るよし、いふ、なが多い坂
長坂はたつせ坂岡原雑云ふ里をすぐ、この間ちいさき坂あまたあり是
にいりて頓原といふ里につく三吉よりこゝまで十里ありやかて馬よりおりてやとる
○五の天気よし 津賀加加義 皆武なといふ所をすぎて山路にかゝる所、あ
かりてはおり、一りてまゐるこゝかしこ谷川多し淋なとありて見るめおかし、家
はまれ、まいとさひし 心地やしあしき上道さくさかしけれバくるしきこと云ふ
ばかりなし 二里余りが所にあつぎからうして掛矢の宿につきていこつり、すこし
その所にて未時ばかりここをいでゝ志曽石中村多久和豊原なといふ
里をすぎて酉時ばかり三刀屋といふ里につく掛矢よりこゝまでの間後みな
つゝあり、頓原より七里とそ今らい朝より心地悪かりけるが午時はかりよりすこし

心よかりつれと歌も一つもえよまずなりにいりて和面にいてゝ見る月いとかすみたり
大方はかすみならんのはるすきをおぼろ月よめつゝ也
やゝあつめていぬ
○十六日天気まだ朝ぎりふかし
八十たついつもの山は八重きりの棚引をちのいつくなるらん
すこしまゐるきりがれひけりのなくをきくて
明ぬるかはかけはさくぬるのはをきりよりふ（此ほう）
このわたりの船の川の川上も此川の隈をくたる程きりすこしはれてはかけさし
けれバ
はえしく峰の朝きりはれそめて和山の松にはかけさすなり
この川は古き文にも見えて何とか 神仙の事なり思ひつけられけるが、今はあや
たらと見えて中流にてかしこ瀬にありて見申る所にあり川はじいと落し一丁

はかりある方に二丁はかりありとおぼしき所もあり、この堤を栗原といふわたり
まで下る間よめる歌とも

こつるなるひの川なみにきそみれば神代をしきわたりなりけり
こちなきひの川わや神の代のありかたつすかたなるらん
すさのをの神の命のなみよりひの川わのあせすもあるかな
千里なる神代のまのひの川も水のなかせはかけきぬらん
神代より流れたえぬ日の川の水のなみなくしるとなし
ひの川やあけに流れしなみの面かけうなくしるもあるかな

この つゝみ以上大なり、人手前といふ里ちかきわたりまで四五里の間つゝみづたひなり
さて三刀屋よりいでゝ堤を行ふ 中下村(チウシタ)、伊萱(イカヤ)村をとりあまして郡堤の棟
木あり後 南飯石郡 西神門郡 とするしたり三刀屋より二里といふに森坂といふ所なる
栗原にやすらひて里人のあるに神の代のなるきあと所など問ふに、この里人い

ふ川のあなたに見ゆるか草枕とて大戦のせて所なる所なりと云ければ見
やるに ちいさき山あり本もなし この森坂より東草にあたりて五里計まに八重垣
大明神の社ありとて このひの川の堤を下るは和西へとさして流れよそひて
下るまで川の左の堤なりされど八重垣大明神の方にしかたのやうにおほ
へそとくしらせば三刀屋より行てまうつびかりしを、こゝよりはゆ、遠けれも
遠に差らてやみぬ、左の方神の口無沙(不見沙と云ふ由)栗原をいふ里あり
この栗原のわたりよりひの川にわたつにあかれて一つは東やにあかれ一つはやに
あかる午時今市といふ里につきて書飯たるべ、や行て松崎(マツヨリ)、此里の八
幡宮にすゐりてこの御社の方へよりこゝら〳〵いぞ切く未時はかり杵築に
つけり、三刀屋より七里なりやとりとして
はるくとまつきの里の松彩(ろうらめつらしく)おもほゆるかな
さあやきし湯あみなとして後 鈴重老 宮のまとをとふらひて何花とおがたり

の序にかの草枕の事をとふに、又はいつはりて由なき事なるといふまでげ
ますと且ひしられける、やかたらひて同時旅居にかへれり、阿古させてあるじ
を呼び、京へはいづれの塔をへたていかゞ日くやなどとひきてのたいぬ、こゝより
楢葉河へ出る方はたゞ有しかよふ事なるをよくしれると丹後殿をへて京
へいる方は四人五人もとひきこれとさらにしらず
○十七日起より雨ふりいでけるもをやみなく夜ふけおきいで、何られととり
よそひて旅宮のあるしを当番者を大社にまゐつ拝殿を拝む、
すべてこの御社の東は神の代に神のつくり五くるあとをくづさず、言はなれ
遠き人の代まったぐいすへのさまるつくりをすべての結構はいふなかく
なり、又御本社の前なる楊門に及りて、こゝよりも拝む、御社の方さいへ大とぞいと
大きしてほかの社とはつくりさまたかひて御社も有向なるが御前の方東より
て軒端よりことぞにはさしいでなる金門（カナ）めくよあり、拝殿より拝する楊門

よりおかむは皆然さしいでたるよの方をさして拝むなり、かつ御社に有向な
るが内陣は西向まておけまずより由されば南よりは大神の左の大御身を
拝むなりそれすがかしことぞ拝むべき方を東るかたよせてよのつね拝
むは大神の左の方の肩なるべく且事さるまでも此大神のいとも尊くく
すき事を且ふことけるもつくしがたければ、たゞかくよめる
天そゝり皆くそひそて數ひなき みいつもしるし神の大宮
天の下つくり生けるいさをしも言ましられて皆き大みや
大神のこゝすのまゝにつくりてし天の日本の宮の尊し
それより云かしこの御社拝むにかきりもなし、赤蠟をもをみしとて蠟屋に
由く此蠟屋をはじめ何殿何所とひめくるに壮麗なることいふはかりなし
門々を見て東の方銀山といふ方に行て和歌家関道のたちをはしめて又御社
のうしろなる八雲山の麓すさのをの尊の御社にまゐりてこゝより云かしこの

二

市社を祈ひいと多く、すべて西東やある所の社の数かぎりなく、
百余国千余国遠きのたちをもろくて、こゝ一方へ、あくりて大名ごの前お去
るほど

いつか又きつまのあるみやけら、ろまきみかけをあふくのあらん
ことは林家おかくりてものほどを絵巻物のとく、つかけていかゞたゞいま
参りそん、はた玄道ごおる西せまほーうちんをどいえやうみ、今ろみすこし
さはる事のはぐれだ、おは道ーと事ごと、こゝ此ろかねそのひかきつる
事おかりおとらかーやりおり、又初ーと又ーと例の学頭国学のを
はゞめ絵めなる経机もなをこの数ともの国学ごえまろらせてよ、あな
たいめの事もよきるそ初ーろひてよ、以つこみけるかりことお経机
ろは、やうそ、ろめらせ事ーたいめの事を国学ごなるのやうなる事の
はれがおほつかおかりーいおこす、ここつくとろの大社の事ろ異ごつ

くるふーしたそく思ん出るまゝ

いくはそお中くをれを言けらたをしちんもなのめならぬ
すめろきのみことや、玄大み神やそくまそうなかりそーんん
八十国をすこらみうれ由つおきてかゝ
すこら言おらなお事を由つ言てを神をしらす独をこ独

また

かけまろも、ゆーまかも、いはさくも、かーこまかー、うつそみの、ちなおことを
大ろみ、ーアめさめ、ありとあろ、ど、ろ、ゆ、ろ、ゆ、ろ、ゆ

大神の　文大宮は　天つちの　よりあひのやけみ　一方化に　さかくをまきん
近行の　山まきぬまき　いさみより　海わたりきて　けりしに　見ひしかとも
けるをおろかむ

人々は日和ならましかば　日の沛嶋の沛社まもうて海邊にいでこゝかしこ
をもみてまをると語りあふ　未時新垂衣ぬしの家に行くに、人々なん閑道
家よりとみの事をも参りつるよしをなき程なければ、子息重風にあ脈
かれこれ語るほどに重衣主かくりて閑道尊孫ぬしの親を乗らすべしと
てとりいぞくさて　たいめの事にお無ならねと　さはる事ありてえなんでは　ぬ、
さるは閑道家の管子尊朝にあれば、いまだおなげかしき程に伴れけど
こまくとことづて云ふ、やゝ新路たくまゐびの事ともかたりて　一間の時旅居に
ぬれり　然にいとて　大輝大夫の使人まゐりて　或道の事ともとふ、此或道は
三年おたゞ三衣部へも奉り給へあひけるがこの代もたゝえてあはざれば、たゞ

かにいつくにありといふ事をもしらず、かの使人の詞は人々に紀の国にありて久
しくかくらこされば　おぼつかなきにうかひまをすなど、しばしかたらひてかへれり
新垂衣ぬしのもとより　此里の人々の詞ぬる短冊ともあまたおくりこせて、かつ人々
のあつらへなるよしいひて　おのが短冊をひるおこす、家垣田　柿園への文を詞
おきてあすなんことづて乗らせんなどいひおこせり　恒教記いぬ、
○十八日　けさ　狩雨なる　和の時おきいでゝよくあつらへられつる短冊かきしたゝめ
もたせやる　市に春山への文とりにつかはす、やゝありてとゝの男かへりて人々しむ
し待ひへといひおこせけれど、立いつるよそひしてあるじにあまり　さゝ、いさゝ
の小濱みにかくこの濱い西おもてをて　波いとあらし
　音にきくいさゝの小濱きて見れば　浮風あれど波さわくなり
この濱をも外代にありつる事とも思ひいでゝ、
いつもなる　いさゝの小濱きて見れいことゝひさけし　外代しおぼつ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

かの方に日の渋味、そこへも多くかりしを京への道いそきけれもたるかに拝
む、かの渋味よりこゝまでは二里ありとそ程近き所にさくこ舟といふあり
この舟とこのいそくの小濱とふたゝ所のうちへ就蟬はきよりとみて、そは
十月十日より十五日までの間ありとそ恵玉神社左の方に見えたり遥
拝をかくるさこの濱毘ちかき所の仮宮(カリミヤ)といふにはあるかのあるじの
いふやう、十月には諸國の神々来りてこの宮に入らせらるゝなり、米とぎな
とする故此井の水白くなるやといふをみるにしめひきわたしたる井あり、
又旅居かくりてやゝ緑に舟重衣ぬのもとより人来りて蒼山の文はた
此里人の短舟おくりこさす、その時こゝを立いづるに雨や又は日かげをりし
さす此里をはなるゝ程

立かくりいつかきへきを思ふるは里のわかれもをしきけふかな

宮岡稲岡をいふわたりすまて又籠の川堤をやゝ下り道て来ぬ時ぬ

かり平田の里につく枠築す四里とそこの平田の川に松江の舟のきあひ
たるに乗りて松江とわたる一里計平田りをこきいづるに布崎の里こゝ
より大なる入江になりて舟人ともは湖といふけるもあるべし、音にきこ
えし大江まで海道にいとはるかなりこの布崎より松江まで五里とそ近き
いとはやし二里はかりゆくに雨又ありいづいとくるし雨時松江の城下につけり
舟よりおりてやとり求めて音もへも雨にぬれてこゝかりし事ともかたりあひつ
いぬ

○十四日雨なほ多く卯の時おきいそ舟まで伯耆の米子(ヨナブ)に渡らんとて辰の時
やとりをいでて舟頃に少くこの松江の入江の川に泊舟あまたあり
はれ行ん程をまつ江のとまり舟とまりの雲もさ又たれのこゝろ
やゝ漕ぎ出るに大なる江にて舟人に中海といふそはさのに渡りこしが湖にて
こゝを中海といひ人千一つあなたがれの大海ありといふ今はこの中海を

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

へて粟へと渡る事也

たゞ我そこの泪もを笑なくこゝ里のかさみたれの宝
うのあたり近い川まで、こゝよりそ中海なりける一面やすを金吹ければ
一面きはひ沙金あらき舟路なれば浦ゝこゝも立ちさわきつゝ
姑くあまり金宝あけれたれと宝はなきなりたりこのあたりけしきいとよし
岡内舟の行かれをいへて

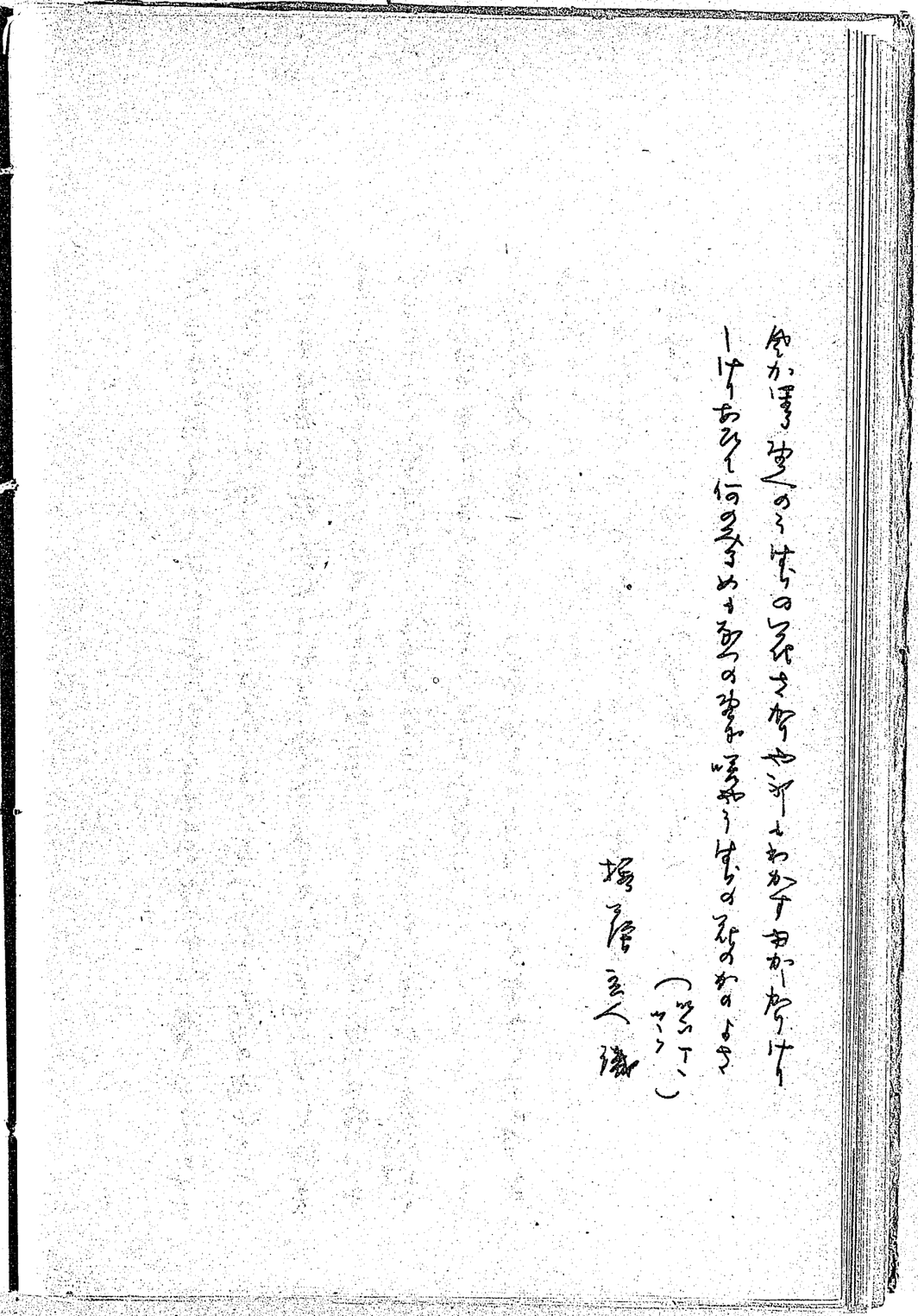
松江より粟へかよりあきくの舟の由きゝもおもしろきかな
金なきけれも舟の由きゝいとおもしろ杜丹鶴、大根鶴をいふ鶴とありて見るの
をかし此舟人のいふをきゝ東金とあ由といふ、なるき鶴の飛れるもやづらし午
時まをりぬれと書頭くけねば松江の鐘をなつすけれとかひ有とく粟へ
すつきてといふ、まだし晴りけるに粟近くなる程めさめて
あきの子かすへえをいへて云とりのよりこの浦に舟近付ぬ

かへり見るに金笠いと面白しされとこゝまでの間晴りければ浦に鶴ととまで
やみぬ松林もこゝかしこと云て例のとめおきつ未時ちかり粟の城下につく
こゝまて中海の舟路松江より七里とそこゝまて晝飯たらですこし休らひ
てこゝを立いでゝ由来日根川といふかあり、こゝまでもかの木綿川の如くせに
おはせて渡る一回時はすり屋宮の里につくやとりとりてあるじをよひ大山へ
発る道の事ともとふ粟よりこゝまて二里とそ
○二十日今朝雨宮よりたらつとめておきいてけるにはるなきぐすの鳴を
きゝて

きゝすなく都しおかなしあらたかのをたかの里の明かたの宝
卯の時ちこゝを立て行ふ又きゝすの鳴ければ
けしたかのをたかの里を朝たちて吾くるあへにきゝすなくなり
さて大山へと発る麓の方かし発るに麓原に茶の茶いと多く咲たり

五

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065



愈かぼる望人のうぶすの花さかりやうしもわかすおかしかりけり
しけりおひて何の事ぬもあつの望の咲やうぶすの花のかのよさ
（笑ひてゝ
ヤウ）
堀原立人識

安藝の日中苗

中止

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

○六月一日雨なこりなくはれて日よし　書して長澤伴雄ぬしの旅居に遊すとて

諸共にはやもたひ見てたひ衣きくちのやしやまあのかたりせん

夜叶山羽隆助来りけれいともあひて寺叶御堂寺上ん家、短冊をもとめに

出くこゝより法水の方へといでゝ坂のもとまでさしの舟離魚何くれと家に

いりて見る法水寺にすゝりて釣殿よりこゝかしこ見渡すに景色いと面白

へ叶見て門前よりハ坂の境の方へと下りて神岡の御社にまうつけ奉雄

なといひて御祭りの鉾につかまつる後人の御社まうしてありしいくたりも棄

物をくるをつゝみなまいと夏暮なるよ如何ひしなるさやかなるわらはなり、

これを見てとてくる人いと多し道もさりあへぬはこりなり、四條略より旅居

にかへれり長沢伴雄ぬしより和み来りけれハひらきみるまゝりに

きの国の山ゐこゝろもつゝみなくうらめつらしき色を待見ん

立ぬれしきの和の雨もたひ衣うらみけれぬるけ和の宅かな

一

音するはせみのかけと思ひしをこれしきせみおつるなみかな
とありさて清水谷右中将度へ来るつきはた城戸千楯のもとへおくる歌詠
めなりて後和泉兵へとかくこは今朝よりせちにあせよといひおこせけるに
今又いひおこせけれすいなみあへ得なん行通すて短冊もとめ重賞ひを
そかしこに立よりて未時はかり新所六角下ゆ二重和泉兵に心たるに聞
くたらおしてさまさまもてなせり夕つけて雨ふりいづ
○二日今朝当すこらつゝ雨ふる、是の雨体雄ぬしよりこよといひおこせけれと云
物せきりつれはなく新書やる辰時さかり城戸千楯のしとをとゝ家伝馬
玉人何かしも来あて何くれと物語して午時和泉兵にもかく宮さやかに皆
たり伴雄ぬしより書来れり驚き見るにけふけとまれかくまれ未時斜より
来へしとせちに言ひおこせけれ此内へかくるへき日数の程せまりけれ
崎山のわたりしるとてこゝを立いつ堀川の橋を流るとて

すみそめて水上遠き堀川の浩き流れはあするもなし
山之内を過て太秦にいたる此里に三名部より銀冶かせやうとしたる
ゆたる人の跡をとふに、此人やうてしるへせんとてさきに立て申く太子堂に集りて
下嵯峨をすき大井川の川へりに至りて
年月はなかれてはやき大井川ありしみ書きをまつの色かな
大井川嘆ちる波のはなみそもまつすることそしのけれなけれ
この此の雨に水かさまさりて濁りたり流年橋をわたりて
大井川水の流れもに流るを心すみそもあたるへきかな
嵯峨の霊宝寺にまゐりて又流年橋をこなさへわたり川へつたひに
少し参りて嵐山を見るにをかしき事いふも更なり
さて暮たに見るめにあかぬあけし山花のさかりを思ひこそやれ
紫あれにあらしの山の山さくらまた暮の春もきそ見つるかな

春の花 秋の夕ぐちの中くにさかみさくらみるもめつらし
又やし行てとおせの瀬を見渡すに花山の峰よりおちくるさまいとをかし
あらし山まの古事に包含て起るとおせのたきの白糸
大井川とおせの瀬を見渡せ、あらしの山の雲なりけり
やゝ見ありきし、もとの川べをすり上嵯峨の方へとわく天龍寺釋迦堂（法堂寺）
に参るすべてこの上坂ち坂のわたりの望をおしまべてさが望と古へよりいへる
なるべし
秋たくはちくさの花の郎人見れこん望へそよく見て行ん
夏深きさかのこちくさ知みても花さく秋をしのひやはせぬ
さて由きて賀沢の池のほとりなる茶店に休みて
いひ出ることのはもなしよたこえてあはれ見るめの蒼澤の池
筆の法にかゝしきて見ん桜衣袖ひろさはのいけるかきりは

鳴瀬の里を過て翁五寺の里 左の方に翁五寺の社ありさて弥宝殿所
の境内を見つ通りて妙心寺の北門通りをわくにそれ立山やの方に見えたり
道のほとりの木居にしけ立とまりて
さしてわらかたくすしき木のなにきぬかさ山の夏を見るかな
又由きて中堂の里なり左の方に大将軍の社とかいふかあり伏拝みて此由ちに
天満宮大智居の前にいつ弥社にまゐりしろしの方より二十望の弥社にま
うつ紙屋川のなすれいときすし
かゝや川 水の心の法けれにかきなうすきことのはもなし
もとこし方とかくそ天満宮の前なる茶店に休らふ是もそれちかくなりけれ
ハ水の伴雄姉しさこそ待家つらめと思ふまいと心いられけれハ、やうて立いでて千
里通りを由くしるべせ男はこゝより別れて右奉へとかゝるこゝより急きて 両
の時三條につく 伴雄姉のこの比うつして今の旅居は木屋町にるなれハ

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

立よりておもかりしおよりはかくしくなりといひてあとより急ぎしとて旅居にかへり
陽あみするうちへしてとくしまゐくといひおこせけれかやうてゆくに住ひて
小橋近きわたりの篠(イケス)まで酒さかなてくぜさせてもてなす この篠の家に
小橋の下を流るゝ川の上つぜ二尺をかたかけてつくりなしたるいと清くつらぬ
川れは鯛(ウ)なこり取る鉄にはかりなりこしかたのおかたり殺かたり何くれと
かたりつゝ御のまゝの法手二尺ばかりをつけて見渡すに波のはやきにつれて、み
つよりほたるのとひあひつゝなれくるさまいとおもしろしこの川をたかせりと
いふよしきくて

たかせりはせせのあみにみたれつゝほたるたるのをいけてすしき
すみわたる川せのおともおかなきにすしきそへてとゝにほたるかな

やゝありて浦の時さかるにてこをいだゝ旅居をよきて大橋を渡り四條瞬より
殘岡即四條川原のすみこゝかしこを眼けまゝ二尺をみめくりて夜時ばかり

かへりていぬ

○三日雨ふる卯の時さかりおきいてゝ人ちは石山三井寺ゆかん伏見稲
荷の社りやとにらんといひかけすゝ雨はけしうふるさかやきして後此るの事
ともかたりいてゝ小倉山に峯山近きわたりなるべきをとひてきませ時殘り多
かるなりいふに初樹にげにおまり急きつるなりいと心ゆしき事かなとかたみ
にいひかはす人ちは香川景樹大橋長賀のもとをとゝにべかりしがさはる
事のありけれハとはてやみぬ辰時斜より佳雄ぬのもとへゆきてしば強る
わけて名山にまゐせまはしかりつれど佳雄ぬ旅居にかへりて晝飯たぶ けさ
和泉弟より翌てしるにおこせけるをけ起れてなたりしに今又尋かされてゆ
くに雨くたるにいたりしけかたらに未時さがり和泉良藤、良照、山羽隆照を
もなひて旅居にかへるに佳雄ぬしおのがかへりの遅きに徐和ひてかへられけるを
人ゝて又まねきて人をと共に名山へとおくに雨やむ あらき宮臺寺に立ずりて左

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

閑居者の政所の弥居間その深かく何れと算といふを見めくるにいとく
めてたしこゝをいそ、大雅堂芭蕉菴一世行庵をも見めしも尾山正所
爾とかいへるこの樹にのぼりて見るに見るめいとあかねず酒さかなてしせさ
せそのくらしと狂かかく掃居にかへるに雨いとはけしかる
の四日けさも尚雨かゝる加茂両社に来らんとて辰時立いて由くさ伴雄有のもと
に立ずして加茂への道すら問きく二楊の樹をみたりてかくし加茂川のかかれ
を見つて
水鳥のかゝの川せのおさまより清き色もすみわたるかな
いさへすみこそわたれ石川やせみのかりのきよきせの音に
下鳥の社につく左の方に川合の社ありすゝづちそこの處は名をしあふたぐ
すの處と且ありも何となく皆おぼへてかりし
ちはやぶる たゝすの森の枝しけみ鳥のみかけのおもほゆるかな

しけりあふ柏さやかに音つれし吹やたゝすのもりの神風
まかくやきてりこそわたれ国治め君をたゝすの森の玉垣
左の方に馬場のあるをあたりの人にとゝ案ことは六月一日に競馬のありしと
言ひき御社の右の方に御手洗れの清くわきいづるを見て立よりて結ぶ事
をもらひやかなる事其のかし
くもりなき鳥のかゝみとみるまでにみたらしの清くもあるかな
みたらしや神の心も由く水のいふ千代かけてすみ濁るらん
みたらしや清き流をむすびあけて心のそこも隔らさりけり
大御社を拝みて橋の杜といふも来るこの社のあたりの木の何のわかるも皆橋
こなるこそ、おやしみなり体みて又大御社のわきよりいそかくに雨やすみる
雲中の細道をたどりし高茂にまうづ大前の方を片岡といふすぎそ
かたをかの楢をかしくなる雨にぬれてをきなけ山時鳥

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

代いとすし

明年も和きてすしまかた岡と神やしめけんやりの下かけ

この片岡の御社も拝みて御手洗をみるにこゝもいと清しこのうしろの御山を神山といふことを思ひいでし

神代より神のしきまた神山と神さひ立てる神のみつ山

八十こぬれいずれしけれ一月代に家をもわかふこれの神山

神山のあふひのかつらつらくにかけてそのふりの古事

こゝより加茂原鷹ぬしのもとをとはまほしかりつれと今は耳しひて物語もうき方なるよりきつれもかしこへ出ぬ事なれ　こなたなる家居を何くれとこのわたりの事ともとひて神山の碁の一家とりてあたくよといふあるし　かのあふひはとることならぬよし云ふこゝまでいしふしといふ魚になきやととふきくしらぬ名なり、ゴリといふ魚にありと云へけるが後にまけはかのゴリといふ

がやがていふの事なりとて、こゝより一世加茂　御芸（ミソド）は隆地（イケ）の方へ行まほしかりしかと千種正二位殿へけふまゐるべきよしきのふ申上おきつれどあまりけふつりてはとてこゝ中かてやみぬ夫は拝居にかへりて手自ら草持ぬしの也をとひ、やうて千種殿へと思ふ内住雄ぬしのもとよりとく千種殿へまゐるべしはや来至へなといひおこせければ由く、この間私君良地来りてや、語ひてかゝる千種殿に来るに御手づゝう屢年見布玉はりけれバいとかしてけれと

信山雪ゐはるかにさく花のまれなる色をあふぐ人万かな

とことはにかくしあふかを信山たかねのまつの一月代のかけ

御茶宮にいざあひ玉ひて蒲茶玉ひ酒ふたまとりしまをおさしめ玉ふ御をはいと近くよりとさ利しとお語りきこえいふる若殿（有文）もいでさせ玉へば御内の人今もきあひて茶生御題ひ夏花といふを玉はりてかつ御詠をしたく

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

め玉ふ仕給ひ打ち祈りおのれ三人ゝゝゝゝ
正之経有功功師
孫せをつみはゞさなん宿曲ふのゝ社もをへみすかり
ふとゝまる。

むらくものねぐらのかけのねぐみつゝ
わ雨ふるそのつゞる雨をたゞこにまつすゝかな
白河のつゝみに雨のふるはすゝ
ほとゝぎすかくる雨ふくをせとさきけ
わ雨ふるそのつゞる雨をたゞこにまつすゝかな
松梅
白河のつゝみに雨のふるはすゝ
ほとゝぎすかくる雨ふくをせとさきけ
年献
松梅
白河のつゝみに雨のふるはすゝ
ほとゝぎすかくる雨ふくをせとさきけ
年献
ほとゝぎすかくる雨ふくをせとさきけ

こひけんもしられざりけれど

おおもせきもなけれとあふ坂や名をもつすみとすりつるかな

なかれてのよの苔もとなすを同の法性やいつくなるらん

峰に至るこそ山城と近江との塔なる下りつゝ見渡すに湖白く見えけれど

あふ坂を吾こえくれハさゝ波やしかのうらつら本の間より又曲

大津の里につきて新宮大橋殿の御社に参りてこゝより江井守にの守るれば

をの守りをつてむ室にまゐるこの所より四方を見渡すに風景いとよし人

のあけるに天香天皇の宮所のあとはいづくぞととふにこの葉の塗る所一せ

らしげしたる方をさしてこのわたりなるよしきこたへきと答へけれど

大宮は千代の苔とあれはてゝのこるもさひし所の一むら

このわたりの今は田なとにたりてあ御しきさまなり

さゝ波やしかの都はなこまのはらはふ田なとやるけるかな

この宮に天の下しろしめしゝ天代の事も思ひいづ

さゝ波のしかの大わたりとみなくあはれ月日のなかれけるかな

ここを下りて葉の茶店にしけ休ひて立いづ大神宮の御社のあるに参りて又

三井寺の長流とかいふに参りてかねを見るにけに世に名高くきこえし如く

ことやうなり、さて唐崎の方へとさしてゆくにかの所の一村あたりの格ども左

の方にみなしてゆくし

さゝ波のしかの子る里ちてとへふ木しけき塗へにうら風ふく

このわたりより大日坂を入るにみねにかかれる雲のけれ由くまゝひらの山の又かく

れけれハ

大日坂やこちらく風に入るそめてひらの宮根をこゝにかくれ由く

穂もなく唐崎に至りてかた田の中を見渡すに雨後のさまいとよし

雨はるしかた田の中に為る雲のいろこき方やとぼつしまゝ山

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

喋

音にきこえしひとつ松のしたに立よりて
からさきの松のみとまほ人ならぬしかの都の昔とはすし
かけひさすまつの古木にさ波のみとりも新しかのから崎
しほならぬうみの見るめと神の代に神やうぶん辛崎のまつ
てゝより四方を見るにいづこかしあけれ有りこの松のはをとりてかくるとて
おきて歎くいろかはチ代を松のはの古きをとりしのふけるかな
てゝより又大津の方へとかへりて打出の濱迄にいつこの濱によるべきの松といふ
かありかからさきの松に遠くさし向ひてかなたくと枝ありたれどかくいふとぞ石山
の方へさしてわたるとてこの濱より舟にのりて
思ふとちうち古の濱に舟出して曲くへをこしきにほの海つら
や潜出て
さ波のうち出の濱をすくらくのをしき濱くぞ舟とめ子ら

粟津の沖をすくるにすと
木曽山の朝日のおこりよかけて名ともかつやくあはつの原
膳所も過て海田のわたりを曲くに
鳩の海や波所はるかにひくくなりいし山寺入相のかね
石山や名をつくるかねのきりもすみこそわたれせたの長はし
洗田川をへて程なく石山につきけれども舟よりあがりて観音にまうでこゝかして
見めぐるに石のさまいとくすき点なり
仙人の事なれば是て立ならぬにほつ岩村ゆゑれにけり
かたへなる二ツ岩き所に発りて勝田の方を見わたせば夕くれのけしきあけれ
なるに夕風すゝしきこと秋にことならず
石山や夕つく風もみすみてなかめにかなせたの長はし
こゝをこゝりて其葉なるにやとりて見わたすに勝田川の川つら清くよろいつゝ

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

ほだるの氣かぶかげもあかぬまゝあばれ夕月のかけさゑかなにまかぜと思
へと詠たれば見るべくもなし
の宮の雨いみうなる 卯の時ここを立いて宇治の方へとゆく宇田(ヒラタ)郷(ソドバタ)といふ
所を過て二屋(フタヤ)こゝまでしるのものやとひて山道をかゝるいとけすさまの雨さへ降
て昔しかげくらき木のした谷代網通りてけ上り上りたゞ下りつゝ
いはかねのこしき山のつくらをりいかなせるとか雨のふるらん
春津りもすきからうして四里山郷室戸寺につく道のくるしかりし事もかたら
あひつゝまらづ宇治の里にいたる宇治の川 橋をわたる
ちなみなるうちの川 波立かへりいやしくしれ 音は来て見えん
みわたせばそらゝかゝるしたけをらのあわときえまうちの川つら
橋姫の神社にまうでゝ
待れたるうきせもあるを流れての名こそ惜けれうちの川 姫

山宮川の音はし里ひろしかくても宮ゆくちのけしひめ
少し行て縣(アガタ)の社にまゐりて縣の井といふを見て
慶法きあかたの井にあ水かみ 昔を今まうつしてそ見る
平等院に行て源三位頼政卿の甲冑木像を見る あふぎの芝の觀
音あり いすゝ個げれていとあはれなり こゝより東の方朝日山を見るに今
日は雨雲にかゝりて中ばかくれたり
雨雲のかゝるもつらし朝日山とよさかの居るかけし見えねど
橋をもとの方へわたりて新宮大明神の社に參りて又直心院に參る所なり川へ
に折いでし山吹の瀬もいづくぞとまゝ、この瀬をこそ山吹の瀬とは立といふ
うち川や山吹のせにたつ波のいはもしのぶ春の陶かけ
橋のつめなる家にて畫館ひて後京にて伴旅ぬしにさいつる宇治稱郎家の
沛濱與聖寺を思ひいてゝかの直心院よりは程もなくまうつへかりしを口

惜き事かなりてまうでなどへと今日は京へと急きけれも又こそおせめと
いふみなのれもさて恋ぬしば休らひて立いづ菅原木山前寺にまうでこそ
かしこと見めくるにいとし浩く大なつりなりて仰めけり、やゝ行て伏見の古地辰
とかいふ所より かごにのる 菅原の御社にまうでし
京の深きみかけをあふきつゝ はるなれは留るふちのかりかな
深草といふあたりをすぐ、こゝは古く親にもよめる深草の里なるへく思ひけれは
ふかゝ草や今はうつらのとゝはふ由もにきはふさとの家村
稲荷の御社にまうつ社業なる事は詞もつくしがたし
若々の古かきく稲のいなり山高きみいかは神なからめなし
よの中の人のいのちをこけるちの神のめくみはあやまたにしと
拝みをへて由くし
ゝ行のふしみの里に旅ねせは京の人やすらしのうまし

申時ばかり三條の旅居につく、雨又ふりいづ さかやきしゆあみなとすらちち、山
羽隆照来りて和泉氏もいたく待遇へりとくかしこに行てこゝろひの香山東
内させて見ゐしとしきりにいふ程に入りて殘囚条禮の香山とかいふを見に
由く俳雄ぬしなも俳ばやとて人して云ひやりけるに折ふし外にものせし由なれ
ともやがて隆照と共に和泉氏に言ふ良介しるしてこゝかしこと香山見め
くるにいとにきはしゝされど雨いふしうふりいづゝを雨みなけれに袖しとゝに收れて
いふせし子の時ばかり旅居にかへれり
○ちる天氣すつとめておきいでゝ 二十八日 後藤上ゝ所の家なる条神の鉾を
見る和泉良介いでむかひて待居たり 俳雄ぬしもやがて来りてともに見
る夏葉なる事は心もことはもつやしがたく其中に又なるこそおぼ
えけれ、鉾山とつぎくに見をへて午時こゝをいでゝ、又ゝに別れ相持と共に北
川母山がもとをとふ、こゝより和泉氏へこの間のよろこびきこえに立ちやがて

二

いとまつけてかへさ城下千楮ぬのもとに立よりてそれより根居にかへりぬ
立のよそひをおする内伴雄ぬ良助隆助見おくりにとてくる白き
あふぎのありあひたるをとりて出たる伴雄
すみたる世みのおりに法けれとかへる貞節の波を悪しき
と書つくこゝを出で四宗わたりまでくるに人多き寄る宮城舟にのりて別る
とて伴雄ぬ
かりしや岩きりとなす白波の立ねこれてもかへる名かな
忘るなの岩こす波の別るとも世みのおりの法き心
かなたまこなたまもかへりみしつゝわすれ由今水かさ立りけれも舟は矢
をいるぬ見し都をはつるほど
なつすき家路すはすれと旅衣なれし夜の別れをそ思ふ
申時はすゝ伏見につくこの舟路三里とぞこゝより舟宿にあかりて夜舟の様

子をひきて、この家に着あるをあつらへ置て八幡山にまゐて物をより舟にのる
べく畏けれバその由あるにいひきかせ荷おつみいれし舟をのるへき所によすべき
よりいひおきて立いづ淀の里にすぎて八幡山の国る岩法師といひて井のある
をこゝみてのむ 御祭まちづいとく仕業しておごそかなれば何をなくるにみて
ありがたくこの夜夜の事はいとも尊くかしこけれどこのはかくるいかなれど
岩法師 法き流れすむ義の家をを神や守りますらん
から人も伴えきてもあやうらしやはたの山の宮きみかけを
ここを下りて一町の時物をつく伏見よりは二里とそ かの伏見の舟宿をも
きて置つる家に入りて酒の気いひくひをして打伏しあれら舟のよするを
まつすこし物ぐりたるに宵時ばかり舟もつとて家人の乗るへけれいやがて
おきいでゝ舟にのる さらでだにせばき舟なるにのり今の人多けれはせぐく
すりて伏すやうこきくたるほど

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

き女とその行かれを見て
たをやめの花の姿にしけりあるかけも喜めくるものよはかな
よあて雨ありいづ
○ナリけさ当雨る 喜当春て出発る 松村に何れとおとのくすとてもくかて
るほど小西何かしを始め相知れるか三人四人来りてさまし発らる午時はか
り喜当辺りけるがやゝありて又来る 松村に未だかくらされに喜当はかりを
つれて春熊まかりとそこ出かやこそ出あひて発らる田中の芳樹をもよひ
るつかはすべしよき折ありそへしてよひにつかはしけるが人手なんさはる事
のあれバしばしすべして寄るへしといひおこす この間題をとりてよむ 雨
中閑佳夜
妹とわかしめおくやとのとこあつはこの名れの雨にさきけり
あてしこの花のたもとにふる雨はたれまつよりの涙なるらん

く朝みれて夜のあてしこぬれにけり雲しりせは笠きせすを
夕まくれ人まやとのとこなつにそくもつらき雨の春かな
やゝありて芳樹のこゝちつれず待ちびてかくるへき軸いふに熊夫まてしばしを
いひてとゝむるよう発らふ未時はありことを云いで長田朝夫のもとをとはす
ほかりしかどあすはつとめてこの里を出立べくかねて思ひしかば心せきてこそ
とて熊夫にことづて云ひおきてかくるさ芳樹のもとへ立ちるへかりしが心せくまて
喜当をやりておのれは旅居に立るに、さきに相知れる人にのもとよりたびくよび
におこせけれとも由かさりけるにしひてくして云ひおこせければいるゝあへ傳由く
登則とかいふ所まで酒ふかなりしかば さきさまりしかたなす 永来何かしもよく
よりおかに旅居に来りてけるに松樹と共に有賀に行をしけるがこゝまでも共に
酒ふかなりすなはいりてくことかへりて後 江の夏といふ事を
代わたるあしの居けに陰こそ夕すしきなるは江の里

○十一日けさ雨いよ〳〵ある卯の時さがりこを立いつるに其事今宮まで遣
来てこゝより別れをつけてかへれり、けさ立いつる折そ人をして二西かしと一つ
かけけるが却そかりけれは住吉の前なる茶店に休らひて待雨愛けれ
も滞船にまうつゝとく葉くありかたきまゝかしこけれと
おほけなく神にたのみをかくるかな宮のまさこの数ならぬ身の
桜の小川のみそきの清きせにいてゝいくよかすみの江の神
時代の治る御代にすみの江の神をそいのる久しかれとも
そ那こ見めくりてこなたの松原をみやりつゝ
住の江のきしの姫松おいまけり神代にすみの江の神ありすして
すみの江のきしの姫松をみれは神代のおもひ出るかな
かのもの男かけだに見えやれむいわいけんをとりぶちつゝ行かへり何くれ
の御社こゝくく舞を一てこなたへ出るに喜の来りけれは神の御目はいつくぞとと

なるかしこなりとさして春なる方を見るに大なる男をめぐりまはれを植ならへたり雨の名残の不明おりけるかくりたるを見れ
すみの江やみとしろ小田の蒼苗に神のめくみの不潜を明れる
さてもとの茶店にかへるにいまだこさりけれはせん方なく立いぞ力なくあら
松原の川縁とはまほしかりけれは人のあるにいづくぞとゝ問らすといふ又曰く
お女の二人ならぬるかたはらをすぎつゝ
住の江のおとひおとめのことゝはんあら、松原いつくなりやと
やゝ行て波花屋とかいふ家なる松を見れに立よるいとおもしろくはれるかのから
浦の松もなら小べき木なり蓋人々とひかけつゝ
家の前のなるはおもはれとことはに見まくのほきまつの色かな
堀の山をすぎてけふかはて心がけ毛髪の帯陰に乗る人かりしをとも人
をまとけ、上住吉の前をいたく待つれも思ひの外に道のほかも行ざるに

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04065

雨又ありつゞけれどつゝみにもあせ侍やみぬ大隅をやうしかの男にあるこ
けけさ別れしか今宮を休らふ内おのれよりさきへ行けるをしらせおそしと
待つゝしをかの男もおのれらをおそしと待つゝし内をかたみに行あす
御いたつら事をもしけるかをこちあらひつゝ出く岸和田黒塚を過て蛸原
屋といふに休む雨の時信達につきてやるこゝまでは大坂より九里西をぞ
○十二日雨はやみたれと定せ為けれりかゝりて卯の時こゝを立いづ
山中の里、蛸の山も過て山口の者ここをかこよりおりてあらくもいす卯月に
こそこゝを過しかなと思ひつけてしのぶのあやまし田井の郷のおたしをあ
たらせ悔なる事なれを休らひて午時さかり岩山弱所なるやとりにつく信
達よりは六里半さかやきし却てのち素食何かしのしとをとひ式家
に立りてやかたらひつゝ本郷の事どもとひきくなどすることをいでゝ家の恒
内を書く経験とかいふ人をあひたりやゝありて此人はかへれり和平ぬ内

かへりて家と共に何くれとおかたりせらるゝにおのれも過すがらの事ともかたる
この向ともの男をして柿園へつかはす雨の時家の恒内をいでゝ柿園へとおく
おかの男にあひたり柿園内はなはおく行れたる内いひけれど旅居に
かへる湯あみて後書よみをする内式人まりて明日は共に直部にまのす
へきよしいひてやゝ後ら不酒さかなぶして共にのむ夜更かへれりおのれはぬ
○十三日宣くる三名部の商人舟のこゝにきあたりけるかかへるへき内いひお
こせけれは大きく便なれはのりてかへるべしいはまちてまとひおきて辰時よ
りいてゝ式家に由ふに立ちいでとてとりよそへば さらは旅居まし行て待
玉へおのれも立する所もあなれはとてこゝより家の恒内を大輝式道岩
峠鞋をきあひたりやゝ後らひて柿園へと由ふにいと待おひたる内に
そはよぐ人をしてけさとくまゐるへしといひおきへれはなり道の事とも親
かたりとりすべかたらふ内酒さかないだして共に気かけしてこゝもさ刻

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

しりがき

此日記をかくことしくかはこしをれたる歌ともの冬望の草のいろ
なきをもいかりなのかくり見すみ汁て、かきしるせしはいとをこがましう人は見
せんとのしれさるはあらて大かたやれる家なりそのは見きし
をかたすしづしるして歌も折に入れて見せまうにとめおきしあれ
はきの海のおきつ玉もの乱れあひいつみなるしのだの森の樹のおちなる
の見るめなく、この国のあしやの里のあしくと見えがめはりまなるしかな
る浦なるおなずちなるれさなるを、きたの中山中々の人おらくるもこそ
と思ひたまたひぬれと細谷川のせまき心なるはさぬきの国志渡の
なる事しとけなしとてさすがなすもそやらて嶽の津なねはなしうの
木ねをはくてあせしは、なかなの浦の長きよりいつくしまねのいつまで
もつ形なるんなれのおのか四やりなとてあん、宮玉山のあらやその道

恋

あしく見過しいつもあるひの川村の心あさくて古くより名高きあともさるべき
所なれども過けんを仮者の国の大神の御ねはけのこる雪のはつくに
のみとさまさまして大方は鳥取の里のとりもらしたる嫁なるべく伯馬の国
のきのさきの清きいて由の行見し所々の名もあまの格之はしたるきを見あれら
は賤の男なるとひきいるれど大江山のおほらかに棚引くものおほしくいひ
あやまりさてあやまりたるもありぬべしはた所々文字に部の大役のまほなる
賤のかきほの音たべたるもありなんかしたぐ所ぢの川波ろかりしよるくしかのか
らさきからさ舞折々あはすのあもれなりし朝とひとよどの川水みづすら
のちはんべしの心ぐさまもとてかきあつめおけるなこそ

天保十年あまりひとせ子の秋

きの国みなべ　熊代　繁里

桜　諸　主人　識

桜館家自筆長寿録廿三年の巻に

天保十二年　寒子　四月五日　国城村村田伴兄金比羅宮に詣ると出立岩山
大坂桔梗備刻備中瀬岐備は安藤周防古屋伯耆岡幡伯馬丹後
丹波京都近江河内和泉ヲ経ニ六月十四日帰宅　日記より

と書かれてゐるが其日記の所在は一向知る事出来なかったのであるが最近整理員
次郎氏によって今自筆の原本の発見せられたのは誠に喜ばしい事である私は田舎所
の故事を記次郎氏が当初有部方面をもとめ小説を見てゐたが親事前日氏
死亡なれば書桜はその首重なるものあるを知らず殆んど反古る様せられたのを
勧んせられたのであるといふこの日記は之まで早苗日記といはれてゐたが其の原本よりて
安藤の早苗といふのか正しい事も出つた全部で五冊であるが第四巻以下目下の事
行衛不明であるか何とかして其所在をつきとめたいものである私も此度諸賢氏
が原本より一時されたものを拝借して待寄したのが此書である往々強学と

元

恭くら[illegible]に[illegible]なるいか大体[illegible]して[illegible]あるといふ

昭和十四年九月十五日より今日[illegible]かゝりて[illegible]

山下井龍水記

毎日
此冊子は山下井龍蔵先生の[illegible]されたよりてある毛筆にて平安朝時代の輕妙なる字体で[illegible]され人口が全一冊表紙共九十八枚是に[illegible]井先生の表紙と跋文とを加へて百枚を誠に[illegible]品のよい[illegible]である自分は[illegible]筆で[illegible]書けず[illegible]建[illegible]を[illegible]万年筆を用ゐて昭和十五年三月十日より十二日迄かゝりて[illegible]世[illegible]を先生に返上した

昭和十五年三月十四

[illegible]京都市上京区[illegible]望石[illegible]町二十五[illegible]地[illegible]居

中根[illegible]

（昭和十二年七月日支事[illegible]以来各種[illegible]を[illegible]して紙は[illegible]入らず[illegible]の[illegible]を用ひたり）

鮮代[illegible]著書　長[illegible]録[illegible]

安藝の日[illegible]

紀伊國名所[illegible]　[illegible]

嘉永元年京都[illegible]の日記

近世名所[illegible]集

山内[illegible]　帝[illegible]集

嘉永三十六人[illegible]

嘉永百人一[illegible]

沖藤[illegible]集

詞花集[illegible]

大[illegible]の記

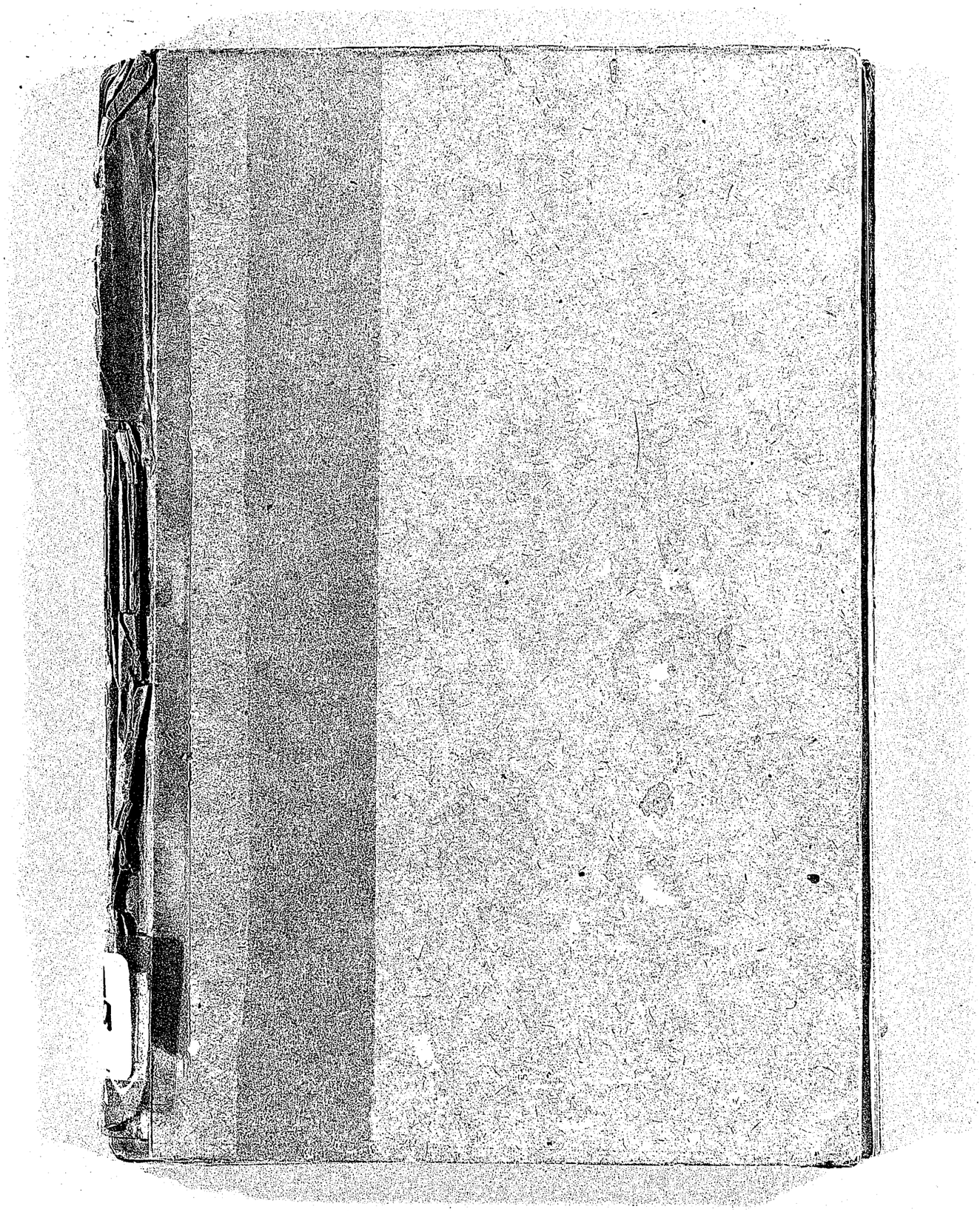
浩渚集

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

無窮日記

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04065